



農 工
通 信

No.92
2017.1

The Graduates' association of
Tokyo University of
Agriculture and Technology



東京農工大学同窓会 TAT
<http://www.tuat-dousoukai.org/>

特別企画

母校の誇り
“農工大の偉人たち”

わが国昆虫学の先駆者 石井象二郎博士 東京農工大学 農学研究院教授 岩淵喜久男	1
応用微生物学の世界的権威 坂口謹一郎博士 東京農工大学 農学研究院教授 山形 洋平 農化院 S62	2
韓国農業の父 禹 長春博士 高野 文夫 化工院 S53	3

【I】心に響く数々の思い出

《国内編》

1. 追憶	関口兵次郎	養実 S23	4
2. 「北多摩郡府中町」のキャンパス	藤本 吉幸	林 S30	5
3. 自己紹介と過去の思い出	大隈 琢巳	養蚕院 S42	6
4. 府中キャンパス回顧	長谷川和久	農院 S42	7
5. 古き思い出	太田 道明	農工 S42	8
6. 苔・スダジイ	高崎 康隆	林 S48	9
7. 変態 metamorphosis	蛭木 理	養蚕院 S49	10
8. 2017年の所感	須藤 一郎	蚕糸 S52	11
9. 自分らしく	牛久保禅一	機シス H5	12
10. 四国松山 俳句甲子園	高橋 大輔	物生院 H6	13
11. 農工大学における6年間	水谷 純也	農化 元教官	14

《海外編》

12. 「アマゾン群馬の森」の管理協力を 同窓会に依頼された経緯	生原喜久雄	林 S41	15
13. キリバス共和国のマングローブ植林での叙勲	馬場 繁幸	林院 S52	16
14. 前略、ニュージーランドより	松木 法生	林 H5	18

【II】研究最前線 これぞ同窓生の底力

1. 農工大発ベンチャー企業 JITSUBO(株) 医薬品企業としての自社品開発を加速	羽石 達生	農化 S36	19
2. 第2の人生は深海魚でバイオベンチャー	野口 誠	化工院 S54	20

【III】お伝えしたいこの事実

1. 浮ついた「日本ワイン」ブームへの警鐘	戸塚 昭	農化 S34	23
2. 科学博物館でのボランティア活動	壁矢 久良	織工 S35	24
3. はじめての入院に思う	高木 利之	織工 S38	25
4. 賞典録	中村 圭一	林 S39	26
5. ボーイスカウトのモットーは「そなえよつねに」	白井 國明	電気 S46	27
6. 21世紀は「農」の時代(その2)	横本 正樹	農 S48	29
7. 東京と高層ビルの風景に思う	有森 正浩	農工 S52	31
8. 役所も人手不足です	藤田 二	農工 S58	32
9. 形を変える	竹内 俊博	化工 H4	33

【IV】ひとこと言わせて教育問題

1. 就職相談員を退任に際して一言 7年間の感想	茂田井 宏	農化 S37	34
2. 年寄り世代の戸惑いと期待	木口 憲爾	養蚕院 S44	36
3. 文部科学省の戦略か	松岡 稔	林 S45	37

【V】絆を強める多彩な部会活動

1. 武蔵野山梧会会報の農学部図書館への寄贈	岡部 廣二	林 S35	39
2. 文芸部～半世紀ぶりの再会～	鈴木(藤倉)輝征	林 S42	39
3. 所感	城間 恒紀	農化 S42	40
4. 昭和45年卒業 ワンゲル部同期会	寺澤 幸一	電気 S45	41
5. 平成27年東京農工大学同窓会 蚕糸生物学部会 総会・懇親会報告	安藤 俊幸	蚕糸院 S51	
	普後 一	養蚕院 S48	42
6. 同窓会千葉県支部の運営について	松田 晴夫	農工 S54	45
7. 同窓会のありがたさを感じる	阿部 雅弘	林 S54	46
8. 東京農工大学若手起業家ネットワーク 設立について	荒木賢二郎	応化 H15	47
9. BASE創立20周年記念シンポジウムが 開催されました	赤井 伸行	生シ院 H16	48

【VI】元気を取り戻そう被災地

1. 森は海の恋人 森も海も恋人	田畑 正紀	林 S55	50
2. 人口 1,142人の町	中里 徹哉	農工 S56	51

【VII】コラム 燃える留学生

1. 来日して17年 留学から研究への道	轟 海松	連農 H22	22
2. 私の仕事	アラタンシャ	連農 H23	52

【VIII】コラム 駆ける同窓会同好部会

1. 農工大への支援をさらに進めるために 〈農工大支援ネットワーク〉	深水 智明	織工 S38	43
2. 国際社会での経験を語った部会活動 〈農工大グローバル・コミュニケーション〉	釣屋 政弘	生機 S54	49

【IX】キャンパス便り <農工大の今>

第2回 「オリエンテーリング部」「ビジネスサークルPigro」	学生サークル 向友会	53
広告		54
事務局だより		55

「表紙のことば」

深水智明 (織工 S38)

『今号では、工学部キャンパスの風景をお届けします。工学部には小金井の名に違わず、多くの桜があり、春には花爛漫です。そして、秋には正門通りの銀杏並木は夕陽に照らされると、眩しく輝きます。学舎では、入学、間もなく皆さんの勉学の館になった春の講義棟を配しました。講義棟の真向かいにはスロープのある新1号館がありますね。大学時代を思い起こしていただければ、幸いです。』

学科・専攻略記表	略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名
	農	農学科	織高	繊維高分子工学科	蚕糸院	蚕糸生物学専攻
養蚕	養蚕学科	化工	化学工学科	林院	林学専攻	
養実	養蚕実科	生機	生産機械工学科	化工院	化学工学専攻	
蚕糸	蚕糸生物学科	機シス	機械システム工学科	工化院	工業化学専攻	
農化	農芸化学科	電気	電気工学科	物生院	物質生物工学専攻	
林	林学科	応化	応用化学科	連農	連合農学研究科(博士)	
農工	農業生産工学科	電情	電子情報工学科	生シ院	生物システム応用科学 後期(博士)	
	農業工学科	農院	農学専攻			
織工	繊維工学科	養蚕院	養蚕学専攻			

(*注:寄稿者分のみ掲載)

特別企画 「母校の誇り “農工大の偉人たち”」

<シリーズ第1回>

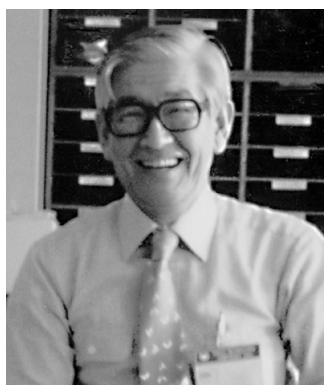
東京農工大学が、多くの偉人を輩出しているという話は、時々聞くことがあります。しかし、誰なのか、どのようなことをしたのかなど詳しい情報に触れることはありませんでした。農工通信では、いろいろな方からの情報をもとに、農工大の誇りとなる偉人を毎号数名紹介する新シリーズ「農工大の偉人たち」を始めることにしました。今回は3名の方を紹介しております。

皆様の中で、このシリーズにふさわしいと思われる方がおられましたら、情報提供を同窓会までお願いいたします。執筆依頼につきましては、編集委員会での議論に一任して頂くことをご了承ください。

わが国昆虫学の先駆者 石井象二郎博士

東京農工大学 農学研究院教授 岩淵喜久男

石井象二郎博士は、世界的に著名な昆虫学者で、ゴキブリのフェロモンやアズキゾウムシの生育阻害物質の研究などで広く知られています。石井博士は、1934年に本学の前身である東京帝国大学農学部実科に入学、2年生になるとき東京高等農林学校への改組があり、農学部本館が建設されるとともに、正門から延びる道路の両側には欒が植えられました。現在大木になっている欒並木は石井博士ら学生の手によって植えられたものだそうです。その後石井悌教授（現在、私が主宰する応用昆虫学研究室（旧害虫研）の初代教授）のもとで昆虫学を学ぶことになり、卒業後は京都帝国大学農学部に入學、農林省農業技術研究所を経て京都大学教授になりました。



石井博士は、常に温厚で上品な紳士でした。しかし、若いころから強力な価値観を持っておられたようで、化学合成殺虫剤による害虫撲滅一辺倒の時代に抗して、昆虫のことをよく知り、そこから害虫駆除を考えようとする基礎研究を進めてこられました。生理活性物質など生物機能を使った生物制御へのパラダイムシフトで、今日の我々にとっては当たり前のことですが、当時においてはきわめて異端的なものだったそうです。この辺の詳細については、石井博士の著書「虫に食べられないアズキを求めて」(偕成社1995年)をお読みいただければと思います。ちな

みにこの本の本扉は農学部本館の写真です。

石井博士は日本の昆虫学を国際的なものにするために尽力し、国際昆虫学会議を東洋では初めて京都で開催して議長を務めるなど、日本の昆虫学の発展に貢献してこられました。なかでもフェロモン研究での功績は大きく、現在、我が国が性フェロモンの利用と合成技術でトップの座にいるのも石井博士の御尽力の賜物といえます。今日でも、人々は国際化を標榜していますが、石井博士の国際化は日本からの発信、自分自身から世界に向けた発信であったように思います。

石井博士は、昆虫研究者だけでなく、子供から大人まで多くの人たちから慕われ、また尊敬されてきました。しかし、これは研究業績とか学会における活動というよりも、研究に対する厳格な姿勢と、学問研究の面白さと大切さを広く誰にでも、わけへだてなく伝えてこられたところにあります。身近にいる昆虫の観察から現象をつかみ、重要な研究テーマにまでもっていく博士のやりかたは、常に見るものを魅了してきました。石井博士の研究は、何だろう?なぜだろう?と思ったところから始まり、一つ一つ謎を解いていくようなやり方で、常に昆虫と対話しながら進めていっているようでした。周囲の人たちはそんな石井博士を日本のファールと呼びました。日本のファールと言われれば我々であれば悪い気はしないのですが、石井博士は、人のまねをしてやっているわけではないとして、これを嫌いました。ちなみに、日本アルプスという名称も好きではなかったようです。石井博士は、産経児童出版文化賞などの賞を受賞されていますが、国からの賞などは、自分の研究はお国のためにやったのではないからと、固辞されていたそうです。

現在、石井博士の遺品は本学科学博物館が保管

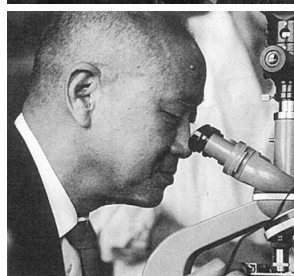
し、一部は農学部本館展示室で展示され、書籍は図書館に所蔵されています。これらは石井博士が御存命の折、まとめて保管して役立ててほしいとの御意向があり、本学に寄贈していただいたものです。貴重な実験ノート、国内外の研究者と取り交わした書簡、研究の考え方などを記した多数の随筆、等々、近代農学の黎明期にその先頭に立って推し進めてこられた足跡がそのまま残されています。我々が懐かしみ楽しむのも一考、しかし、将来の科学を担う学生諸君には是非とも見ていただきたいものです。

応用微生物学の世界的権威 坂口謹一郎博士

東京農工大学 農学研究院教授 山形 洋平(農化院 S62)

坂口謹一郎先生は、「お酒の神様」と酒造業界で敬われており、「君知るや銘酒あわもり」という論文や「日本の酒」、「世界の酒」など多数のお酒に関する著作や随筆で知られています。坂口先生が昭和10年に本学の前身・東京高等農林学校が東京帝国大学農学部実科から独立し、駒場から府中へ移転した際に、農芸化学の教授として赴任され、学生の指導に当たられたことをご存じの方は少ないかもしれません。醗酵・醸造に関わる研究を行い日本の醸造学・醗酵学を確立され、お酒と短歌、雪椿をこよなく愛された坂口先生のご足跡を紹介します。

坂口先生は、明治30年に新潟県高田市(現・上越市)で生まれました。大正11年に東京帝国大学卒業後、農学部の副手に就任し、助手、講師を経て昭和2年に助教授に昇任します。この助教授時代に東京高等農林学校の教授(兼任)として赴任されたのでした。当時の卒業アルバムには、武蔵野の原生林が広がった本学周辺の写真とともに若き



「坂口謹一郎先生追悼記念文集」より画像引用

坂口先生の写真があります。

坂口先生は、昭和13年に「菌類による有機酸類の生産並びにその工業的利用に関する研究」で日本農学賞を受賞。翌年、教授に昇任。Rhizopus 属や Aspergillus oryzae (麹菌) など糸状菌(カビ)の有機酸生合成経路の研究を展開します。この成果は、後に微生物分類方法の一つとして提唱され、世界各国の菌株保存事業へと発展しました。また、合成酒製造に必要なクエン酸醗酵の研究を TCA サイクルが知られる以前から行い、その工業化に大きく寄与しました。太平洋戦争中も、アセトン・ブタノール醗酵を初めとした多くの研究を活発に継続し、昭和17年に米穀利用研究所(現・食品総合研究所)所長、昭和19年に発足した碧素(ペニシリン)委員会委員となります。

戦後は、半合成ペニシリン生産を可能にしたペニシリンアシラーゼの発見(村尾・坂口、1950)、無色素ペニシリン生産変異株の造成(有馬・小笠原・坂口、1951)などを通じ、抗生物質生産に重要な役割を果たしました。昭和25年に日本学士院賞受賞、昭和28年には東京大学応用微生物学研究所初代所長に就任。微生物の有機酸代謝の研究、火落酸(メバロン酸)の発見(田村・坂口、1956)、鯉節の旨味成分5'-リボヌクレオチド製造法(国中・大塚・小林・坂口、1957)など日本の醗酵学を単なる実用学ではなく生化学的研究へと導き、日本の応用微生物学を世界に広めました。

昭和33年に東京大学を定年退官され、昭和42年に文化勲章(「微生物学醗酵学の発展に寄与」)、昭和49年に勲一等瑞宝章を受賞されました。平成6年12月に多くの人に惜しまれながらご逝去され、従三位に叙せられました。

坂口先生は、歌人としても知られ、還暦を迎えられた昭和32年に「歌集醗酵」、昭和63年には、「愛酒楽酔」を出版されました。また、昭和50年新春お歌会始の儀の召人にも選ばれています。

坂口先生は、近代日本の応用微生物学を確立された巨人です。多くの著作で坂口先生のそのお人柄や考え方に触れることができます。読んでいるとお酒が恋しくなるのが難点ですが、ぜひご一読下さい。

韓国農業の父 禹 長春博士

高野 文夫（化工院 S53）



禹長春（ウ・ジャンチュン博士）

韓国で、国家最高勲章を受章し、国葬級の葬式で弔われ、今でも『韓国農業の父』と讃えられている『禹長春（ウ・ジャンチュン博士、우장춘、通名：須永長春（すなが ながはる）』氏は我ら東京農工大学の

出身です。

今日は、きっと皆さんが知らずにいて、聞けば驚くであろうお話をさせてください。

『韓国農業の父、禹長春博士』のお話です。

実はその日系韓国人の功労を称えて、それこそ人格化されて、銅像まで建てられている人がおられるのです。韓国においては『農業の野口英世』のような方なのです。

私も仕事で韓国を数回訪問したことがあります。韓国きっての試験農場のそばに禹長春博士記念館があり、もちろん銅像もありました。同行の周りの韓国人が尊敬の念をもって、私をも見つめているような気がして、私自身も、ほんとに日本人であることと、そして農工大の卒業生であることを誇りに感じたものです。

実は、80年以上前の韓国は、国民を上げて貧困で飢え死にする人が続出していたのです。

それは、農業の技術レベルがあまりにも低かったからです。それを救ったのが、日系韓国人『禹長春博士』と日本の農業の技術だったのです。

日系二世の『禹長春氏』は、嘗ての東京帝国大学農学部実科（東京農工大学の前身）を卒業して、韓国に帰り、キムチの原料、白菜や大根の育種をし、たいへんな功績をあげたのです。それだけでなく、遅れている韓国の農業を日本のレベルまで引き上げる事に貢献したのです。

今ある韓国のキムチは、日本人ハーフの『禹長春

博士』が作ったと言われています。そして今、『韓国農業の父』また『キムチの父』とあがめられ数か所にその銅像があるのです。

実は、歴史的動乱の中で、国賊となって殺された父を持ちながらも、苦労に苦労を重ね、韓国の農業界の偉人として韓国で一番最高位の勲章まで与えられているのです。

韓国ではいま、道德の教科書にさえ載っており、ほとんどの国民が彼を知っています。韓国の農林大臣になってくれないかとの要請はお断りしたようですが、葬式は国葬に準ずる社会葬になったというのです。

東京農工大に留学中は、事情があって、いわば大学に亡命してかくまってもらっていたようです。実は、お父さんが国賊として殺害されていたのです。（いきさつは、Wikipediaやネット情報で見てください）

禹氏は、日本女性の渡辺小春さんと結婚し、4番目の娘は、京セラ創業者の稲森和夫氏のお嫁さんになっています。



韓国国際園芸学会での禹先生のコーナー

嘗て、韓国KBC（韓国のNHKのようなもの）と日本のNHKが共同して、このことを『ドキュメンタリードラマ』にして両国で報道したことがあるそうです。

どうか、ネットで『禹長春博士』と入れて調べてください。そして、願わくば、学生や院生の皆さんが禹長春氏のように、Globalレベルで世の中に貢献する人間になって頂きたいと祈るばかりです。

Wikipediaより抜粋；

1. 東京帝国大学農科大学実科は旧制専門学校相当の課程で、東京帝国大学農科大学（農学部）本科ではない。東京帝大農学部実科は、1935年に東京高等農林学校（新制東京農工大学農学部の前身）として独立した。
2. 禹長春博士の生涯（角田房子、わが祖国-禹博士の運命の種-、新潮社刊 1990年。

I . 心に響く数々の思い出

国内編

1

追憶

関口 兵次郎(養実 S23)

我が家では、初代と2代が種屋(蚕種製造業)で、明治の中頃から昭和の初めまで、「小石丸・又昔」を製造し順調に推移した。しかし、交雑種(ヨーロッパ種との掛け合わせ)の時代となり、3年連続で違作をし倒産した。その後は繭副蚕糸業に転向し、やはり蚕の路で生計を立てた。私は昭和3年生まれ、お袋が飼う蚕棚の下で育った。当然ながら、蚕の道に進んだ。幸い、昭和22年東京繊維専門学校(現東京繊維専門学校)の蚕業実科生となり、翌年3月卒業して新潟県職員に採用された。爾来、38年間この道一筋、昭和61年3月で退職した。勤務場所は研究畑で約5年、行政畑で(主に本庁)15年、普及畑で18年(8か所異動)お世話になった。ご案内のとおり、戦後、我が国の蚕糸業は見返り物資の大宗として、GHQの指令で蚕業の振興が図られた。即ち、事務次官通達により全国に蚕業技術指導所が設置された。我が新潟県は昭和23年9月に7か所(新発田、長岡、六日町、十日町、柏崎、直江津、村上)、昭和24年10月に2か所(金沢、小出)、昭和25年12月に1か所(五泉)、昭和28年8月に1か所(松代)、と都合11か所で地域における蚕業普及体制を整備した。その結果、昭和30年には戦後最高の繭生産量を達成した。我が国では繭の生産過剰により、昭和33年桑園の減反政策を始め、さらに夏秋蚕種の2割に掃立制限を科す等、繭の生産は順次抑制の方向に舵が切られ始めた。ところ

で、新潟県の養蚕は小規模、多労働、低反収の「養蚕三悪」が依然として解消されず、しかも養蚕立地は中山間傾斜地で、かつ豪雪地帯であるため、養蚕収益は極めて多難であった。一方、我が国農業もすでに曲がり角に有り、如何にこの難局を克服するか焦眉の急に迫られていた。河野農林大臣は、その打開策として、『新しい村作り運動』を提唱され、新たに農山漁村建設総合対策事業、さらには昭和36年度には第2次農業構造改善事業を組み立て、なお、その体制を盤石にするため、昭和36年に「農業基本法」を制定した。これら一連の施策により新潟県の養蚕は息を吹き返した。即ち、国の補助事業による「協同養蚕」の推進である。また米余り対策として我が国初の水田転作事業も我に味方した。暫くして、沈滞し続けた本県の養蚕も漸く軌道に乗り始めた。しかし、時に土光臨調(メザシの土光)とも云われた増税なき財政再建。まさに徹底した行革の断行であった。新潟県も昭和56年全国に先駆け「事業見直し課」を発足させ行革に打って出た。そのため、繭検定所の廃止、蚕業試験場の縮小、蚕業指導所1か所実質5か所制の改革だった。農水省、農政局、群馬県には多大な御迷惑をお掛けした。我が常に思う事は「駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人」と云われるが、人には夫々に役割がある。しかし、養蚕農家は蚕糸絹業の中で最も不条理な立場にあると思う。此の事を立証する資料はないか、常々思っていた。漸く退職間際にその資料に出会った。それは、訪問着一反が小売店の店頭に並ぶ迄の費用分配である。「養蚕家で1.5%、蚕糸家で0.4%、織物業で1.9%、問屋筋で46.2%、小売店で50%」となっている。あ～そうだったのか、養蚕

家は何と割に合わない事か。川下の暴利とはいわれないが、川上がかなり犠牲になっていた事は確かであろう。小生職を辞して31年正に老境に至る。茲に、同窓諸兄のご多幸を念じ筆をおく。

2 「北多摩郡府中町」のキャンパス — 駒場短歌会と幻のボクシング部 —

藤本 吉幸(林 S30)

1951(昭和26)年農学科入学当時、学長は田中丑雄先生、農学部長は石井悌先生だった。2年次に林学科へ転じたが、各学科ともヒューマンな先生ばかりだった。

当時30人程で活動していた駒場短歌会に入ったが、しばらくして代表として活躍していた獣医学科3年の岩田浪之助氏から、短歌会の仕事を引き継ぐよう言われ第3号から「駒場短歌」の編集発行にとり組んだ。夏目先生ご夫妻をはじめ教職員の外、短歌人選者の清水政雄、林間選者の水町京子両先生も時々顔を出して下さった。第1号の巻頭言は岩田氏が田中学長から頂いたが、私が引き継いでからは表紙の絵や巻頭言は石井、川上両先生や、講師で作家の小田嶽夫先生、高山茂七郎先生にお願いした。先生方は超ご多忙中にかかわらず、いつも快くお引き受け下さった。1952年3月の第4号巻頭言で石井先生は「……将来駒場短歌会から短歌の大家も出てよさそうなものである。私はそれを望む」と書いておられる。私は1954年3月の第7号までで、石川不二子さんに引きついだ。在学中から「短歌研究」の第1回50首詠入選を果たした逸材は、その後、釈超空賞等数々の受賞に輝き、今や短歌界の大御所である。石井先生もさぞ喜んでおられることだろう。先年百五歳の長寿を全うされた夏目静氏は、朝日歌壇のご常連として九十歳を超えてなおみずみずしい歌で感動を与えて下さった。

入学前ボクシングをやっていたので、櫻並木

の下にあった三多摩拳闘会の門をたたいた。梅野林会長は往年の日本フライ級チャンピオンだった。静岡県就職後もその後のボクシング界の消息を届けて下さった。同門で林学科2級先輩の榎本氏はセミファイナルクラスのプロ八回戦選手だった。二人でボクシング部を作ろうと、武道場でライト級とJフライ級の公開スパーリングをやった。見物は大勢集まったものの、入部希望者はなく、農工大ボクシング部は幻に終わった。

卒業後は新設された専攻科に籍をおき、静岡県採用後間もなく、川名明先生のご指導のもと専攻科で実験していた「アカマツの空中とり木」の成果を箱根で開かれた日本林学会関東支部大会で報告した。川名、土井雅子両先生と連名で、これまで百篇を超す林学会等への発表論文の第1号だった。静岡県在勤中は同窓会支部総会にはほとんど欠かさず出席した。目黒にあった農林省林業試験場勤務を経て熊本の九州林木育種場に研究・技術担当の育種課長として赴任した。熊本の同窓会支部総会でも各学科の大先輩がおられたが、今では自身が先輩格になってしまったものの毎年総会を楽しみにしている。

林学科同期は30人。9人が宇宙へと先立ち、闘病中の者もいるが、昨年5月28日には横浜中華街に11人が元気な顔をそろえた。各支部総会、クラス会とも世話役諸氏のお骨折りには何時も感謝している。



川上繁先生作 第4号 1952年3月

3

自己紹介と過去の思い出

大隈 琢巳(養蚕院 S42)

私は昭和17年に長崎県の佐世保で生まれ、小学校2年で福岡県八幡に移り、小学校5年に小倉に移り富野中学、小倉高校を卒業して東京農工大学養蚕学科に入学して東京に単身上京しました。理工系に選考していましたが、倍率の低い養蚕学科に合格した様です。まだ自分の本当にやりたい事などはっきり決まっていたわけではなく東京に行きたいという思いが先行して養蚕学科に入学しました。最初の1年間の教養学部は府中の農学部であり、小平の叔父の家から通いましたが、専攻科は小金井の繊維学部であり、小金井の寮に移りました。繊維学部の寮の思い出は楽しい事が多く遊びの多くは寮で知りました。麻雀、パチンコ、おいちょかぶ、酒、たばこなどあまり健康的でない遊びばかりです。徹夜で麻雀したりお金を集めて飲み会したりと寮生活は面白い事でした。親からの仕送りなのでお金がなくなると食堂のアルバイト、賃金の多い土方の仕事や年に一度の天皇杯に府中の競馬場に貸し切りバスで人員整理のアルバイトへ行って馬券を買ったことなども懐かしい思い出です。農工大の柔道部に入り忘れられないのが柔道部の歓迎会です。新部員ばかり1列に座りその周りに先輩部員が座ってやかんで温めたお酒を湯呑茶碗に先輩部員が次々にお酒を満たしていくのですが、まだお酒の経験がなくて先輩部員の言われるままに飲み干して行ってトイレに行こうとして立てなくなってしまいました。這って行って立ち上がるのに苦労したことを覚えています。トイレでかなり吐きました。帰りはタクシーで帰りましたが、どうやって帰ったのか覚えていません。これが酒の飲みはじめでした。講道館に段を取りに部員の方々と行って背負い投げが決まって黒帯初段が取れた時はと

てもうれしかった事が思い出されます。大学での卒論は田崎教授の研究室で光合成に関する研究でした。水と光と炭酸ガスから炭水化物を作る事が工業化される時代が来るという事は素晴らしい事だと思いますが、現在光合成の研究はどこまで進んでいるのでしょうか?興味深く思っています。大学卒業後就職についてどうしようかと迷っていましたが、修士課程が僕の卒業した年にできました。あまり気に入った就職先も見つからず修士過程をあと2年受講することに決めました。遺伝研の諸星研究室に入り蚕のホルモンである幼若ホルモン(アラタ体から出るホルモン)と越年ホルモン(食道下神経節(SG)から出るホルモン)の拮抗作用を証明する研究でした。アラタ体を蚕から摘出すると脱皮せずすぐに繭を作り蛹になります。蚕のホルモンの研究も興味深いものでした。2年の修士課程が終わり、就職先も決まらず非常勤の理科の講師を高校と中学で掛け持ちを受け持って終わった後、諸星研究室で実験を続けておりましたが、1年後に小平の蚕糸科学研究所(蚕研)に就職しました。此処は蚕種の改良をするところで色々な蚕の品種を掛け合わせて品質の良い繭、寒さや病気に強い蚕になる蚕種を作り出す所でした。静岡大学の田島弥太郎教授が所長となられ雑種強制についての研究をされておりましたが、単為生殖の蚕を作り雑種を作り雑種強制を証明する研究でした。かなり興味深い実験でした。

ある日、僕の従妹リンダが叔父さんと叔母さんと一緒にアメリカのシアトルから東京に来られ蚕糸科学研究所にいる僕を訪ねてこられました。叔父さんと叔母さんは和歌山に住んで居られて良く知って居りましたが、リンダとは初めての出会いでした。とても綺麗で優しそうな顔で一目惚れしてしまいました。これがきっかけとなりリンダとの結婚とアメリカのシアトルへの永住になってしまいました。

リンダのお父さんは車の板金塗装のビジネスをしておられ、此処で見習いの形で始め、いつの間にか6年も経って、1977年の7月にリンダの父がリタイアされてビジネスをテイクオーバーする事となり2015年の12月に長年僕の下で働いていたボーイにビジネスを譲り1年半のリタイア生活をしております。大方44年間も車の仕事に携わった事になり専門外の職に良く辛抱して来れたと我ながら感心しております。父、リンダの父、リンダの母、リンダ、僕の母と身近な人が次々と亡くなり寂しくなるばかりです。子供にも恵まれずだんだんと孤独に追い込まれていくようですが、健康で長生きをこれからの仕事と考え自分の運命に任せてできるだけ楽しく、また、ボランティアも出来るだけするようにしたいと考えております。木口さん家族1年、故吉田さん家族1年、朝比奈さん1年とシアトルのワシントン大学に留学されて楽しい思い出ができました。また、林科の福士さん家族と畠山さん家族との出会いもあり楽しい思い出となっております。普後さん夫妻、故須貝先生夫妻、故田島先生夫妻もシアトルへ来られました。健在の皆さんと再会出来ればと思っております。シアトルは夏の期間は3か月ぐらいですが、日陰に行くのと割と涼しくあまり日本の様に蒸し暑くは感じません。冬も暖流が流れているため割と暖かく余り雪も降りません。雨が多いところですが、海や山が近くにあってフィッシング、特にサーモン釣りはリンダのお父さんによく連れて行ってもらいました。秋になるとレーニア山やカスケード山、シェルトンなどでマツタケ狩りができます。冬はスキー場が近い所で車で1時間くらいで行けますので、日本から来たところは良く行っていました。カナダまで車で2時間で行けます。カナディアンロッキーも景色の良い所です。アメリカは広いので、元気なうちにアメリカの名所も見て回りたいと思っております。そのためには健康でいなければいけ

ません。食べ物に気を付けて適度な運動をするように心がけております。

4

府中キャンパス回顧

長谷川 和久(農院 S42)

新制4大に農学系大学院修士課程が設置されるようになり、2年目に東京農工大に新設された。

私は鳥取大の肥料学研究室で、ラッキョウの養分吸収について卒論に携わっていた。4年間学寮におり、先輩の影響もあり勉強をと思い、昭和40年4月農工大院の1期生となった。肥料の松本通夫教授(当時農場長、奥様は砺波市出身)のところに入り、農学部本館裏の駒場縁の木造平屋、由緒ある緑色の木造研究室で学んだ。途中、ピンク色4階建て校舎の2階へ移った。農場網室で1000分の1アールポットによる化学肥料に比した有機質肥料(堆肥)施用水稲について相対的な養分吸収の特徴を調べる試験をした。分析では栽桑学の本間慎先生(当時講師)のところで比色計を利用させていただいた。



中国内蒙古自治区烏海市の沙漠で循環型農場 1,000ha 造成協力中 (右:田氏、左:筆者)

当時、保温折衷苗代発展に関わられた近藤頼己先生(学長)や訪問時お宅の廊下に書籍を図書館のように積み上げられて研究されていた大谷省三先生、ブルーベリーの特徴を熱く話された岩垣馳夫先生、話し方に特徴ある土壤・黒部隆先生、農場の渡部直吉先生など多様な方々に学

んだ。国分寺の一里塚に部屋を借りていたので武蔵野の林、黒色火山灰土壌の畑を通り、自転車通学。

頼まれて中学校「理科」を教えに日野市南平の七生中、多摩市の稲城中、教養棟隣の府中一中などへ行った。なお、教養生物におられた日高敏隆先生に養分吸収がらみで、食ほう細胞のことを尋ねに伺ったが気安く対応して下さり、大先生の人柄に敬意を払った。

植物栄養学特論は、東大の熊澤喜久雄助教授(当時)に学んでいた。ひょんなことで2年次、晩秋農場の渡部先生より神奈川中央農高(厚木)で年度内に教員を補充したいとの話があり、免許があるから私に話を聞いてこいと言われ高校へ伺った。その帰り、府中駅から自転車で大学正門へ右折する際、国分寺方向から走って来た大学生の運転する車のボンネットに乗せられた。翌日昼過ぎまで約十数時間脳振とう他で意識不明であった。目撃した方々は死亡しただろうと思ったという。

こんなことがあり、後に東大植物栄養・肥料学研究室の研究生となった。その後、御縁で自宅(小矢部市)から通える石川県松任農高、石川県農業短大(現石川県立大学の前身)に奉職した。同短大では農水省から着任された伊藤博先生(育種・農工大先輩)がおられた。先生の御苦労で、昭和56年金沢市にて、日本育種学会が開催され、ノーベル平和賞のノーマンボーローグ博士が招待講演された。話の中で世界的な小麦の多収「緑の革命」のもととなった小麦農林10号育成の親、稲塚権次郎(先輩)が南砺市出身で、氏のおかげと感謝された。人の御縁を感じた。ちなみに、拙宅の背戸に樹丈約8m、幹5本仕立ての桑の木がある。一番桑葉が食われたあと再び全枝緑の葉を展開、桑樹の生命力を見る。農工大の校章と重ねて、大学の発展を思う昨今である。

5

古き思い出

太田 道明(農工 S42)

昭和30年代は私達の年代にとって、最も多感な時であったかも知れない。まして、私は田舎の大家族の中で5人兄弟の末っ子として感受性の強い子と言われながら大きくなった。小さいながらも“家族のため”という気があったのか、当時、広々とした庭で鶏と山羊を飼った。餌を段取りしないといけないので、結構、忙しかった。ぐるりは農村地帯なので、餌の取得には困らなかった。餌やりを始めた小学校3年生から、運搬用の自転車に野菜の屑を満載に積んで家との間を往復し、休みのない毎日で結構、忙しかったが、苦にならなかった。というのも、山羊や鶏は餌の時間がわかるようで、混合した餌に飛びつくように食べてくれるのが嬉しかったし、また、見返りに玉子や乳を与えてくれるからだ。また、餌となる葉っぱの屑は百姓屋が別に取り置きしてくれたし、身体の小さい私が野菜屑を大きな竹籠で自転車に積み込むのは無理とみて、大人が2人がかりで積み込んでくれた。小学生の私を大事にしてくれて本当に楽しい飼育時間であったが、思いがけない終末を迎えることとなった。

それは全く予想もしていなかった山羊の死であった。当時、村の近辺には獣医はおらず、大事な山羊もみすみす死においやることとなり、悲しみはとてつもなく大きなものであった。家族は、今度は赤ちゃんの山羊から飼えばと言ってくれたが、とてもその気にはならなかった。もうすぐ、中学に入学ということもあり、動物を飼うというのは止めることにした。このような時期に私より一廻り上の長女が山羊の墓を家の裏の畑につくったと言ってくれ、その上、母の実家に連れて行ってくれるというので、喜んで付いて行った。大和の古寺で、閑静な中にも品

のある雰囲気気持が洗われるようで、気分転換にピッタリだった。“とと姉ちゃん”の主人公みたいな姉だが、貧乏家庭を支えて奮闘してきてくれた姿に、今も感謝している。

私が旅行好きとなったのは、この姉のおかげであるが、もうひとつ中学校の修学旅行、それも九州、行きは夜行の汽船で、帰りは汽車(寝台車)で福岡、大分、長崎、佐賀、熊本の5県を3日間めぐる旅となり、楽しみが一杯であった。1日目は大阪港から関西汽船別府まで行き、そして、阿蘇へ向かった。

別府からの途中の景色は想像をはるかに越えたもので、阿蘇山の頂上へ行き着くまでの草千里や牧場、そして、世界一のカルデラ火山と温泉など、どれも言葉に表現できない程で、心踊るとはこのことかと感じた。クラスメートも同様で華やいだ楽しい雰囲気は旅行を一層、楽しいものにしてくれた。翌日は熊本城や水前寺公園などを見学し、最終地となる長崎へほぼ1日かけてまわった。グラバー邸や大浦天主堂、それに長崎の出島などを見学し、修学旅行に参加できたことに感謝した。この旅行が引き金になって、72才になるまでの間、計9回の九州旅行を経験した。修学旅行から今に至る57年間、大きな自然災害もなく、観光地としても最高の場所であった熊本県、特に阿蘇山周辺域に大きな地震災害が生じたことは大きなショックで、1日も早い復興を願っている。(奈良県支部長)

6

苔・スタジイ

高崎 康隆(林 S48)

苔

子供の頃から苔が好きであった。現在もファンである。生まれ育ちは東京都渋谷区笹塚。通りに面した自宅は甲州街道へ数分の位置にあり、遊び環境で自然といえば「原っぱ」しか無

かったが、家の並びに高い石垣があった。間知石積の目地に生育する苔が気になって気になって、それは輝いて見えた。

小学生のある日、そこからほんの少しをもらって来て、木片に彫刻刀で細工して小さな鉢を作り植えた。同じ町の植木屋さんは父の仕事上の知人で、そのおやじさんが遊びに来ると私は自作の苔鉢を自慢した。こんな小さな自然体験が自分の原風景といえる。

中学生の頃には盆栽を習っていて、師匠は70歳の江戸っ子。この師匠の「創作盆栽」は手作りの鉢と樹が一体となった作品で、ひとつひとつに世界を感じる事の出来る存在感があった。宇宙を感じたと言ってもよい。師匠からは、持っている技術を全て教えるから後継者にならないかと勧められたが、その頃には自分の興味は日本庭園に移っていた。石も好きだったのである。写真中心の「カラーボックス」という文庫本サイズの出版物の中に、『水石』とか『京都の庭』というタイトルをみつけては小遣いで買って来て、飽かずに眺めていた。建築士であった父の影響があり、高校生の時には庭園の設計を仕事にしようと決めた。

大学は国立一期校に千葉大学があり、その造園学科を受験したが不合格、二期校の農工大学林学科に合格となった。当時の自分には「造園」の文字しか頭に無く、一年浪人して千葉大学を再受験しようかと悩んだが、兄の友人が農工大学に在学していて林学科でも造園関連の授業があることを教えてくれた。卒業後のいろいろな場面で、農工大学に入学して本当に良かったと思ひ知る。

スタジイ

卒業論文では奥富清先生ご指導のもと、「都市林の構造」を主題にした。東京都内のスタジイ林を調査して都市生態系のほんの一端を明らかにしたのだが、比較調査の為にいった千葉県に残るスタジイ自然林の内部景観に圧倒された。

神々しさと形容してよい世界があった。

卒業して造園設計の道に入り、現在は庭園の設計監理、ランドスケープデザイン、文化財庭園の保存・復元・公開活用計画などの業務に携わっている。3年前に調査の機会があった皇居内「吹上御庭」の主木も太いスタジイであり、江戸の庭園の雰囲気をも今に伝えるものと思う。近代の自然主義庭園と評価される山縣有朋の小田原別邸「古稀庵」は、東京の庭師・岩本勝五郎作庭であるが、主木にはスタジイが大胆に斜め植えされていて「かっこいい」と思う。自分が2013年に作庭した世田谷区二子玉川の日本庭園で、特別にこだわった木はスタジイの一木である。なぜなら、この庭園では「江戸の粋」をデザインコンセプトとしたからである。卒業論文のための調査でスタジイと接していたために、その魅力に確信をもって作庭できた。農工大学で学んで良かったと思える一件である。



世田谷区立二子玉川公園内日本庭園「帰真園」のスタジイ

7

変態 metamorphosis

蜷木 理 (養蚕院 S49)

幼虫－さなぎ－成虫と変態するカイコと付き合って40数年、平成26年3月31日に定年退職し、4月から一般財団法人農林産業研究所の主任研究員として栃木県矢板市に引っ越ししました。矢板温泉まことの湯の敷地内で、74℃の温

泉を利用して付加価値の高い熱帯植物を栽培しようと思っていました。

そもそもここに来ることになったのは、平成25年の5月、千年篤先生主催の農業実践セミナーに参加した際に、講演者に同行されていた方から財団法人で人を探しているとの情報をいただいたのが始まりでした。その後、財団を運営している新宿の印刷会社の社長が農工大に説明に来られました。退職が間近に迫ってきた12月に栃木への移住を決めたのは女房でした。私には年金がありますので、矢板では研究活動の資金をいただき、給料は女房が温泉で働いていただくことにしました。

農工大学には17年半、その前は農林水産省の研究所に16年半、大学院を修了してからなんと34年を無事に勤め上げました。そのご褒美として、退職直後にフランスに遊びに行き、4月14日(月)から勤務を始めました。初めての土地ゆえ、何をやってよいか分からず、とにかく種をまくことに専念しました。勤務開始から1か月を少し過ぎた5月31日、新たに開設するバーベキュー場での作業中、心筋梗塞を発症し、13日間入院しました。幸いなことに、仕事中に発症したため、同僚や女房、子供も近くにおり、処置も早く事なきを得ました。

その後、数カ月は何事もなく過ぎましたが、8月29日、今度は温泉の店長が倒れ、帰らぬ人となってしまいました。ここに来て4カ月少々、仕事もまだ覚えつつある状況で、本社から派遣された我々が温泉の責任者という形になってしまいました。本社からの明確な要望はありませんでしたが、改修費の備蓄ができるような業績のアップであることは容易に理解できました。焦っても仕様がありません。できることを着実にこなしていくだけです。

矢板温泉には日帰り温泉のほかに貸山荘が併設され、周りの山も所有しています。1年目にはキノコの原木栽培(シイタケ、ヒラタケ、なめこ、

マイタケ、クリタケ)も始めましたが、放射能検査用の試料栽培といったものでした。温泉施設の敷地内ではハーブのようなものしか栽培できず、仕方なくハーブティーを作りました。また、以前から植栽されていた杜仲で杜仲茶を作り、平成28年2月にこれらは“やいたブランド”に登録されました。

温泉の湯守が身に付き始めたころ、本社の会長が農林産業研究所の仕事としてナルコユリはどうかとやってきました。ここ1年農業貢献を考えてきましたが、これといったものはありませんでした。調べてみますと、ユリ科の多年草であるナルコユリは黄精(おうせい)の原料として日本薬局方に収載されていました。食べてみるとそれなりに美味しいので、新しい農業作目になり得ると考え研究を始めました。当初は中華料理の食材としてフリッターのようなものにして食べていましたが、餃子がよいとの意見を参考に、まことの湯特製餃子に混ぜてみました。その試食会で、温泉チェーンの万葉倶楽部会長がこれは商売になると認め、プロジェクトがスタートしました。この会社は東京魚市場の移転先である豊洲に温泉レジャー施設を展開することになった企業で、施設開業の際に全く新しいメニューを開発する意図がありました。万葉倶楽部会長の高橋さんはまさに行動力の人で、ナルコユリの産地を巡り、その代用品として、近縁のアマドコロに目を付けました。

ナルコユリはユリ科の多年草で、栽培試験では1年に1芽しか増殖せず、商業ベースの生産は難しいと思われました。ナルコユリをインターネットで調べてみますと新潟を中心に、長野などでも園芸用切葉の栽培が行われていました。実際に現地を訪ねますと、ナルコユリというのは、実は斑入りアマドコロでした。アマドコロはナルコユリに似ており、生薬としてはイズイや玉竹の原料として知られていますが、日本薬局方には収載されていません。しかし、増

殖性のよいアマドコロならかなりの量を手にすることができます。ただし、アマドコロは園芸用として栽培されていたものですから、食用とするには残留農薬の検査が必要です。

アマドコロ入りの餃子については、万葉倶楽部会長の尽力により、岐阜で無農薬栽培されているアマドコロを使い、この半年ほどでほぼ完成しました。ちょっと甘口のニンニク臭くない食べやすい餃子に仕上がっています。

定年後は農業を中心に、穏やかな第2の人生を夢に見ていました。しかし現実には、朝7時から夕方5時過ぎまで、休みは週に1日とこれまでにないハードな毎日を送っています。アマドコロ、ナルコユリは、現時点で食用農作物とはいえませんが、新たな作目として伸びていく可能性があります。これからさらに利用範囲を拡大する研究を実施し、新たな農業作目確立に力を注ぎたいと思っています。



8

2017年の所感

須藤 一郎(蚕糸 S52)

この寄稿を依頼され、大学卒業後群馬県庁に入庁し、農政部蚕糸課に配属された当時、同窓の先輩から群馬西ヶ原交友会会報に寄稿を命ぜられ、タイトルを「雑感」としたところ、新人の貴方には相応しくないと指導を受けたことを思い出しました。その勅使河原司郎先輩とは、同窓会群馬県支部事務局を共にして、公私ともにお世話になったところです。

当時、群馬県支部総会は伊香保温泉の岸権旅

館で毎回開催されました。それは、御主人岸権三郎氏が同窓だったからでした。久保田富一郎、大河原清一両先輩の大号令の下、元気で愉快的集まりで、夜遅くまで大いに飲み、語り、伊香保の石段街を闊歩したものでした。翌朝、伊香保から前橋に下る途上にも一面の桑畑があり(昭和53年—1978年、群馬県の桑園面積=約3万ヘクタール)、伊香保温泉を愛した明治の文豪徳富蘆花が、「機音の音、製糸の煙、桑の海」と群馬県を表現しましたが、赤城山、榛名山の長い裾野から関東平野を一望し、まさに「桑の大海」を朝日に向かって漕ぎ出していくような情景でした。

事務局を担当した縁で多くの先輩にも出会い、特に、西尾邑次鳥取県知事や森下元晴衆議院議員が来県された折、岸権での懇親の場などに緊張しながら同席させていただき、かつての寮生活や政治・経済の動きなど貴重な話を聞かせていただいたのは良き思い出です。



さて、平成26年(2014年)に世界文化遺産に登録された富岡製糸場は、明治5年(1872年)に明治政府が設立した官営の模範製糸場です。東京農工大学の前身である農事修学場及び蚕業試験掛が内務省勧業寮に明治7年(1874年)に創立されたのと軌を一にしています。

富岡製糸場は115年後の昭和62年(1987年)まで操業して、142年後に世界遺産となったところです。

もちろん、長い年月の富岡製糸場の運営・操業、そして今回の登録にも、多くの同窓の先輩

が様々な形で係わってきたところです。

私も蚕糸課勤務時、操業中の富岡製糸場を何度も訪れましたが、その後、平成18年新政策課政策主監で担当した特命プロジェクトの一つとして世界遺産暫定リスト推薦に携わり、操業停止後も工場の自動繰糸機が今にも動き出しそうな姿に驚き、同年11月小寺弘之知事(当時)に同行し文化庁長官へ推薦書を提出したことや、平成26年6月中東・ドーハでの世界遺産委員会を構成資産の一つである「高山社跡」で振興局長として地元市長と見守り、登録決定の瞬間に大勢の県民の皆さんと万々歳をしたことを思い起こします。富岡製糸場は、世界遺産登録に加え国宝となり3年となります。是非、皆様も「富岡製糸場と絹産業遺産群」と、伊香保、草津や磯部などの群馬県の「温泉群」を訪ねてください。

私は、群馬県庁退職後学校給食に係わる公益財団法人で新たな仕事に取り組んでいます。母校の発展を祈念し、多くの同窓生に恵まれたことに改めて感謝しつつ筆を置きたい。

9

自分らしく

牛久保 禪一(機シス H5)

私は平成5年に機械システム工学科を卒業しJR貨物に入社しました。人生山あり谷ありと語るにはまだ早いような気もしますが、学生の頃に思い描いていた未来とは随分違うものになったものです。転機は何回かありましたが、やはり入社半年後に当時の現場長から「運転士を経験してみないか?」と言われたのが一番大きかったかと思います。それから半年間の運転士教習を経て電気機関車の運転士を3年間ほど経験しましたが、以来技術畑ではなく鉄道運転系統の職場を移りながら今年の4月からは隅田川機関区の区長を務めています。

昔、「若いうちは苦勞をしろよ」と先輩によく

言われたものですが、ご多分に漏れず自分も苦勞をしました。入社10年目頃が一番きつかったですね。上からのノルマと下からの苦言の板挟みという中間管理職の悲哀もたっぷり味わいました。その頃は精神的な余裕もなく自分の人生に疑問を持ったり、生きることの意義を考えてみたりとかなり厳しい状況だったような気がします。そういう時に自分をどうしたいのか、自分で取捨選択出来るカードをどれだけ持ち合わせているかは重要だと思います。それまでに培ったスキルでもって状況を打開してみたり、蓄えた人脈で状況を変えてみたりと人それぞれだと思いますが、転職っていうのもそのカードの一つでしょう。家族を支えにするって人もいます。じゃあ、自分はどうだったかという趣味に逃げました。別に仕事を放り出して趣味に逃げたわけではなく、仕事をしつつストレスを発散する場を見つけたという意味ですが、とにかく自分の場合は“山”に逃げました。

当時、松本に転勤になったのですが、その時に行った上高地の景色が印象的で、河童橋から見えた穂高岳を見ていたら上から眺めてみたいなあっと。まあ、その時は見てみたい程度だったのですが、その後黒部アルペンルートに行った際に室堂から立山に素人登山をして見た景色が感動的でした。



どうしても穂高岳の上から上高地を眺めてみたいという意識が強くなり本格的に山登りを始めました。人間目標が定まると不思議と力が

湧くもので、とにかく穂高岳に登れる体力と技術を身に付けようと月1回はどこかの山に登るようになりました。結果として公私のメリハリがついて仕事の張り合いにもつながったのかなと思います。結局松本在勤中は叶わなかったのですが、転出した年の秋に念願を叶えました。それ以来北アルプスを歩いています、体力と一緒に気力も高まった気がします。

学生のころに今の自分は想像すら出来ませんでした、全て積み重なった結果で今の自分があるという納得感があります。そう言えることはとても幸せなことなのかもしれませんね。

10

四国松山 俳句甲子園

高橋 大輔(物生院 H6)

八月の第三週の土曜日。愛媛県隋一の集客を誇る松山市の大街道商店街に、全国の地方大会を勝ち抜いた36チームが集結する。俳句甲子園全国大会の初日である。翌日の準決勝・決勝の行われる松山市総合コミュニティーセンターのステージを目指して、熱い戦いが繰り広げられる。

今年(平成28年度)で19回目を迎えたこの大会は、全国で137チームのエントリーがあった。9チームの参加で始まった第1回大会から考えると、松山の誇るとても大きな大会に成長した。

俳句甲子園は5人1チームによる団体戦である。先鋒戦から夫々1句ずつを披露し、お互いの俳句に対して制限時間内に質疑応答を行う。審査員は俳句の善し悪しと質疑応答を評価し、勝敗を決める。司会の「判定」という掛け声と同時に審査員は紅白の旗の何れかを挙げ、旗の数の多いチームの勝ちとなる。

勝利の決まった瞬間抱き合って喜びあう高校生。旗の差1本で敗れ、俯いたまま涙を流す高校生。見ている者までもらい泣きしてしまうシーンが繰り広げられる。

この大会は、NPO法人俳句甲子園実行委員会が運営している。70人近く居る実行委員会のスタッフは、ほとんどが正規に別の仕事を持つボランティアである。実行委員長は建具職人、副実行委員長を仰せつかる私はソニー生命保険(株)の営業である。その他ガス会社の社長、不動産会社の社員、県職員、米穀店店主、大学教授、テレビ局アナウンサー等々誠に色々な職種の人の集まりである。大会が近づくと、委員会の会合や地域関係者との折衝、物品の手配等非常に忙しくなり、仕事をこなしながらの活動には苦勞も多い。しかし、スタッフはその苦勞を楽しみながら笑顔で活動している。



私が俳句甲子園に携わる理由。それは何より、俳句甲子園が好きだから。高校生の成長の速度は大人の何十倍も速い。真剣に俳句と向き合う2日の間に、彼らは凄まじい成長を遂げる。それが、近くで見ている手に取るように分かるのである。彼らの人生に貴重な1ページを残せたなと感じると嬉しくなる。

私が俳句甲子園に携わる理由がもう一つある。東京出身の私は、農工大博士前期課程を卒業して、24歳で松山に赴任した(前職は帝人化成(株)に勤めていた)。今年で47歳になるので、人生のほぼ半分を松山で過ごしたことになる。これから先も松山にお世話になるつもりだ。私の青年期～壮年期を育ててくれた松山のためにできることは何か。それは、俳句でこの街を盛り上げるお手伝いだと考える。今や全国区と

なった俳人夏井いつき先生(TV番組プレバトの名物先生)の門を叩いたのが8年前。以来、俳句の魅力に嵌り、技術は一向に上達しないものの、生活の中に俳句がある豊かな日々を過ごしている。この素晴らしい松山の俳句文化を、俳句甲子園を通じて全国に発信することが、この街への恩返しだと思うのである。

11

農工大学における6年間

水谷 純也(農化 元教官)

私は1963年5月に東京農工大学農学部農芸化学科に奉職しました。そこで有機化学を担当することになりました。それから約6年間勤めさせていただきました。アメリカのマサチューセッツ工科大学(MIT)フレーバー研究室に博士研究員として3年近く留学して帰国したばかりで、これからは研究と教育に従事するのだと張り切っておりました。優秀な学生が多く、そういう人たちを育てることに生きがいを感じていました。

若くて新米だということで、いろいろな役目を仰せつかりました。厚生補導委員もそのひとつです。厚生というのはともかく、補導というのはものものしいと思いましたが、学生と接し、いろいろと相談に乗るという役目です。1967年4月から1969年3月までの2年間でした。今でも憶えているのは、寮生との話し合いで、一夜寮で議論をし、朝になって寮生たちから朝食をご馳走になったのは良い思い出として残っております。丁度、大学紛争が始まる少し前でしたが、学生と直接接すると話が通じない訳はないことを実感しました。農芸化学科の学生を連れて関西方面まで、国公立の研究機関や企業の工場見学に出かけたことも思い出として残っています。すべてはこれからというとき、私の母校の恩師から北大農学部に新しい講座ができるので、戻って来ないかという話がありました。い

ろいろと迷った末北大に移ることにしました。私の研究室を出て名古屋大学の修士課程に進学した西村弘行君と一緒に北大農学部に行かないかと勧めたところ、修了と同時に行ってくれることになりました。西村君は助手、助教授を経て北海道東海大学に移り教授、北海道東海大学学長、東海大学副学長を歴任し、現在も北翔大学学長の要職にあり、今や北海道にとってなくてはならない人になりました。農工大学で同級生だった大野哮司君は当時、農工大学助教授でしたが、北大農学部で分子生物学担当の教授として選考の結果、大野先生に来ていただくという結論に達しました。しかし、残念なことに大野教授は着任後僅か4年余で急逝されました。まだ50歳前の若さでした。これからの活躍が期待されただけに本人はさぞ無念だったと思いますし、私たちとしても本当に惜しい人材を失うことになりました。

本年6月(2016年)、昭和42年(1967年)農工大学卒業のクラス会が幹事役の西村北翔大学学長の企画により定山溪温泉で開かれました。同期生13名と夫人1名が集まりました。私も招待され、昭和42年卒業生諸君と旧交を温めることができ、本当に至福の一夜を過ごしました。このクラス会は毎年全国各地で開かれ十数年も続いているそうです。私が農工大学を離れてから47年余になりますが、深くて固い絆のようなものを感じた次第です。



(平成28年6月15日、定山溪温泉)
前列左2人目；西村北翔大学学長（幹事）
前列左3人目；筆者

海外編

12 「アマゾン群馬の森」の管理協力を 同窓会に依頼された経緯

生原 喜久雄(林 S41)

1992年6月、ブラジルのリオデジャネイロで国連環境開発会議(地球サミット)が開催され、地球環境にとって熱帯雨林の果たす役割を世界の首脳が初めて話しあう歴史的な会議であったが、時の宮沢首相は欠席されたため、ブラジルに住む日系人の中には、日本人の環境保護意識の低さを問われ肩身の狭い思いをしたという。

地球サミットの後、群馬県出身による在北伯群馬県人会は、「アマゾンに暮らす日系人が今日あるのは熱帯雨林の恩恵であり、この熱帯林が破壊されていく事への警鐘と熱帯雨林の保全のシンボルとしてふさわしい森林」を探していたところ、ベレンで熱帯林を有するブラジル人から森の購入の話が持ち込まれた。

場所はブラジル北部の中心都市ベレン市の郊外約70kmの所にある540haという広大な原生林で、登記条件は「伐採しない。転売しない。貸さない」であった。

その年、サンパウロで群馬県人会の40周年記念行事が開催され、群馬県から多くの関係者が出席しており、群馬県人会の会長は故久保田富一郎(当時、同県議員、東京高等農林学校林学科昭和16年卒)に相談した。久保田氏は早速、活動を開始し、1995年に当時の県知事を会長とする「アマゾンに群馬の森をつくる会」が発足し、コンセプトとして原生林はそのまま残し、①熱帯雨林保全のシンボルの森であること。②百万日系ブラジル人の親睦の拠点にすること。③熱帯雨林学術調査のための開放施設であることとした。

久保田氏が募金実行委員長となり、広く一般県民、県内企業などから精力的に募金を集め、

およそ3,000万円の浄財が集められた。平成8年に予定通り540haの原生林を購入し、平成10年には群馬県人会館(ビジターセンター)と研究棟が完成した。森の所有権は在北伯群馬県人会として登記が完了した。

購入した原生林は大学や研究所等に熱帯雨林学術調査(ただし伐採は禁止)のために開放することから、当時、久保田氏は本学同窓会会長(平成5年度～平成10年度)で、本学や同窓会のブラジル熱帯演習林(仮称)として活用できないかという問い合わせがあった。

平成10年5月に開催された第35回同窓会通常総会において、ブラジル熱帯演習林計画については、同窓会の係り方について法的にも実際的にも効果的な方策について検討し、改めて提案できるよう継続審議事項とするものとした。その後、平成10年12月に梶井学長、伏谷総務局長が群馬県責任当事者(久保田同窓会会長)とお会いし、会長から本学が当該の熱帯林活用の「連絡校」としての参画を提案された。また本学同窓会には法的、人的、資金的な迷惑をかけるものでないとの確約があった。

更に情報収集のため森林環境講座で担当することになり、生原(当時事業副部長)が群馬の森に詳しい群馬県林務部の大塚克己氏(本学製糸学科昭和47年卒)から次のことを確認した。

540haの原生林、建物等の管理・運営に係る費用等については全て在北伯群馬県人会が責任をもって対応する。管理・運営費用は、原生林の一部での胡椒栽培で捻出する。日本からの一般見学者については、群馬県の方で対応するが、研究者の利用についての窓口は東京農工大学農学部林学科(森林環境学講座)にお願いしたいという意見をいただいた。

そこで、森林環境学講座から下記の意見を当時の同窓会理事長の東野文男(機械工学科、昭和38年卒)氏に平成11年4月に回答した。

「ベレン群馬県人会の所有している森林の日

本からの研究者に対する窓口として本学同窓会が対応することについて、ベレン群馬県人会、群馬県と更に検討する。実際の対応としては、本学同窓会の林学部会および森林環境学講座の教官が行う。」

その後、部長会議で検討し、平成11年5月に開催された第36回通常総会で、同窓会としては、「アマゾン群馬の森」の利用研究者の窓口として、実務的に林学部会および関係する本学教官が協力していくという取り扱いについて検討していくことにした。

その後、バブルの崩壊、遠方であることなどから、現在まで「アマゾン群馬の森」への研究利用に関する申請は提出されていない。現在は、アグロフォレストリーの試験展示圃場としての利用や環境教育のフィールドとして群馬県の子供たちが訪れている。本学の教員、学部学生、大学院生が訪問し、資料収集等を行っている。

大塚氏(NPO法人群馬の森の会理事長)からは機会があったら東京農工大の教職員・学生および同窓会で、更に活用してほしいとの依頼があった。ベレン近くへ行く機会がありましたら訪問してみてください。

13

キリバス共和国の マングローブ植林での叙勲

馬場 繁幸(林院 S52)

地球温暖化に起因する海面上昇の影響を深刻に受ける太平洋島嶼国の一つが、人口約10.2万人、33の環礁からなるキリバス共和国である。独立は1979年。日付変更線のすぐ西に位置しており、世界で一番早く朝がくる国でもある。日本とも関係が深く、ギルバート・マーシャル諸島の戦いと呼ばれる太平洋戦争中の激戦地の一つで、今でも毎年のように墓参や遺骨収集が行われている。

この国のマングローブとの付き合いは2004



「アノテ・トン大統領（右）からの勲章と証明書の授与」

年からとなる。太平洋島嶼国で活動している日本のNGO (ISME) がキリバスでのマングローブ植林の可能性を調査して欲しいとの依頼を受けたのが最初で、翌2005年からコスモ石油エコカード基金の助成を受けてマングローブの植林を行い、これまでにキリバスの子ども達や村人の皆さんと一緒に植えた数は10万本を越えた。現地ですぐに採種し、植えられる種類は限られており、今のところはヤエヤマヒルギ1種だけである。

キリバスでのマングローブ植林は、①河川のない島々で構成されているので、日常生活に欠かすことのできない淡水を用いることのない植林であること、②沿岸への植林によって海岸侵食を少しでも抑制できること、③沿岸への植林によって土壌の堆積を促進することで海面上昇による水没を少しでも遅くすること、④植林を通じてゴミの投棄等の身近な環境問題に気がつくきっかけにさせていただくこと、⑤植林を通じて、地球温暖化による海面上昇に起因するとされる海岸侵食等の地球環境問題の深刻さに気がつくさせていただくこと、などと勝手に思い込んでいる。

10年間以上もキリバスでマングローブ植林をしていることから、2016年3月11日に御退任されたアノテ・トン大統領とも懇意にさせてい

ただいていた。

通常、マングローブは海水と淡水が混ざり合い塩分濃度が海水よりも低い汽水域に分布しているが、キリバスのように、海拔高が高いところでも3メートルに満たない小さなサンゴ由来の島々には河川がないので、植林地の塩分濃度はほぼ海水と同じである。このように塩分濃度が海水とほぼ同じであると、塩分濃度の影響で植えたマングローブの成長は良くないし、残存率も高くはない。そんな立地環境であるから植林に少し工夫をし、高密度密植法で残存率の向上に努めてきた。

キリバスの独立記念日は7月12日であるが、2015年7月初旬のある日、日本在住のキリバス名誉総領事から電話がかかってきた。独立記念日にキリバスに来て欲しいとのことであった。日本出国まで、あまりにも時間がなかったので、独立記念日にキリバスには行くことができない旨の返答をさせていただいた。用件は独立記念日の式典の中で勲章授与式を挙行することであった。独立記念日にはキリバスに行くことはできなかったが、マングローブ植林に現地へ赴いた2015年10月19日、アノテ・トン大統領から、日本人としては初めての叙勲でthe Kiribati Order of Meritを受け取らせていただいた。身に余る名誉なことであった。2005年からのマングローブ植林で、キリバスの国土が多少とも緑化され、海面上昇で国土が水没することが、少しでも遅くなるのであれば、嬉しい限りである。2013年3月に琉球大学を定年退職したが、現在も特定非営利活動法人国際マングローブ生態系協会 (ISME) の無給の理事長の仕事は継続している。キリバスの勲章を拝領したからというのではなく、キリバスで住民のみなさんと一緒にマングローブを植林させていただくことで、キリバスになんらかの貢献ができるのであれば幸いであると思いながら、これからもマングローブ植林を継続するつもりである。

前略、ニュージーランドより

松木 法生(林 H5)

早いもので東京農工大学農学部林学科を卒業して20余年になり、私の場合のそれは、ニュージーランド(NZ)で流れた時間とほぼ重なる。いまだ若輩者ではあるが、ここまでの約半生ずつを日本とNZのそれぞれで過ごしたのだと、振り返ればそれなりに感慨深いものがある。

当時、NZへ旅発ったのは、「外の世界を見てみたい」という冒険心が何より強かったが、「林工」研究室の恩師、木平勇吉先生の影響も大きい。木平先生はNZの林業研究所に勤務された経験をお持ちで、講義でもその頃のスライドを使われたり、時に脱線しては思い出話を語られた。やはりこちらも林学を学ぶ身、冒険心のその先に、林業が盛んな国を渡航先に選んだのも必然であったのだろう。以降、現地にて就職したのち現在に至るまで、幸運にもNZの林業・木材産業に携わり続けている。

最初に就職したのは、山林経営からの丸太販売や製材・合板・集成材製造販売などを手掛ける総合林産企業で、こちらではNZ林業・林産業のいろはを含め、若手として本当に様々な経験をさせていただいた。中でも懐かしく思い出すのは、採用直後の数ヶ月を、来る日も来る日も伐採業者とともに山の中、チェーンソー片手に木を伐り続けたことだ。余談だが、林学科卒とはいえ実務ド素人の人間をいきなり現場のど真ん中に放り出す等、今となっては考えられない。ゆるき良き時代であったということだろう。

その後、縁あって転職、北欧拠点の林産業特化型コンサルティング・ファームのNZ社に長きにわたりお世話になった。業界から一步下がった位置でクライアントに専門的なサービスを提供する立場、ここでもコンサルタントとは何者ぞやから始まり、癖のあるプロフェッショナル

集団のなかで揉まれながら多くを学ばせていただいた。グローバル企業内の環太平洋地域グループの一員として、海外出張の場数も数多く踏むことがなかった。もっとも行く先々は森林や工場がほとんどであったが……。

そして2013年に独立を決意、現在はフリーランスとして「林産業・木材コンサルタント」を名乗っている。今度は自営というものをまたいちから勉強。きつくもあり面白くもあり、長年サラリーパーソンとしていかに守られた環境で仕事をしてきたのかを痛感している。ここで唐突だが、当方のウェブサイトとメールアドレスを付記する勝手をお許し願いたい。お時間あればぜひご覧いただき、お気軽にご連絡・お問い合わせください！(website:NZmokusai.com、メールアドレス noriobox@gmail.com)

最後に、いち海外在住卒業生にいつも「農工通信」を送ってくださる編集委員会の皆様、ありがとうございます。海を渡って届けられる便り、母校や同窓生のことを想いながら楽しく拝読しています。



II. 研究最前線 これぞ同窓生の底力

1

農工大発ベンチャー企業 JITSUBO(株) 医薬品企業として自社品開発を加速 — 農工大支援ネットワーク(AT-Netz)の 活動の一環としてのベンチャー企業支援 —

羽石 達生(農化 S36)

JITSUBO株式会社 [代表取締役 河野悠介氏 (生化院 H14)]は、ペプチド医薬品に特化した研究開発事業に取り組む東京農工大学発ベンチャー企業である。小金井(工学府)キャンパス内にある農工大・多摩小金井ベンチャーポートを中心に事業拠点を置き活動している。現在、農工大副学長の職にある農学部応用生物科学科千葉一裕教授(農化院 S58)と河野社長らが府中(農学部)キャンパス1号館で生み出したシーズ技術の実用化を目指して、2005年に創業した。大学で発明されたコンセプトをベースに同社において革新的なペプチドの合成・分離精製技術として競合力のある基盤技術に発展させた努力が評価される。

2014年に現在マザーズ上場の「そーせいグループ」株式会社の傘下に加わり、製品開発ビジネスのノウハウの吸収、人的、経済的な支援を得る事で、一気に成長スピードを上げている。

2016年8月に、同社は、大日本住友製薬系列のDSファーマアニマルヘルス社と動物種の胃産生ペプチドホルモン「グレリン」について、動物用食欲増進剤としてのグローバル共同開発・事業化契約を締結し、原薬製造を分担すると発表している。医薬品開発事業の具体化をめざし、最初の一步を踏み出した。

創業当時、経産省主導の大学発ベンチャー1000社計画や、国立大学独法化などの流れで多

くのベンチャー企業が生まれた時期で、当時としては、資金も乏しく事業スペースも20m²という厳しい条件の下で、スタートした。幸いなことに創業時より良き人材、大学からのサポートに恵まれ、数々の危機を乗り越えながら、12年目を迎えられたと河野社長は振り返る。厳しい競合にも耐えられる技術基盤を構築し、逆風に対しても気力にあふれ、努力を惜しまず、前向きに立ち向かう同社の姿勢に感銘を受けた筆者は、医薬品の研究開発分野に長年身を置いた卒業生の一人として、AT-Netzの大学発ベンチャー企業の活動支援の一環として、2010年ごろから医薬品の研究開発に関わる一般的な知識やグローバルな規制当局、製薬企業、アカデミアなどの最新動向をニュースとして毎週提供するなどして、微力ながらサポートを続けてきた。

ペプチド医薬品はインスリンの発見以来100年近くの歴史があり、特にホルモン補充療法を中心に発展してきた。日本にはペプチド関連生理活性物質の研究で世界的にも著名なリーダーを生んできている。武田薬品のリュープリンなどに代表される、日本発のペプチド医薬品も医療現場で活躍している。すでに世界では50品目以上の製品が上市されており、2020年を境に売上高1千億円を超える大型製品の特許切れが断続的に見込まれている。その一方で、候補物質探索技術の発展により、多くの新規ペプチド医薬候補品が臨床開発段階に進んでいる。

同社は今後の展望として、人口の急速な高齢化と治療の困難なアンメット・メディカル・ニーズの高い病気が増えている事を考えると、今後の医療と医療保険制度を持続可能なものにしていく工夫は、時代的要求として認識している。

日本では、後発医薬品(ジェネリック医薬品)の数量シェア目標を平成32年度までに80%以上とするなど具体的な目標が出ているものの、ペプチド医薬品に関して、後発医薬品専門メーカーはペプチド原薬に関するノウハウを持っておらず、優先的な開発対象になっていない現状がある。一方、近年新薬の開発成功確率の低下や、開発費用の高騰から、製造コストの低減も重要な課題になっている。

以上のような社会的ニーズに応えるべく、河野社長は、「当面の戦略として、ペプチド後発医薬品原薬、投与剤形の改良に集中した開発を進めている。本事業では従来の原薬製造技術に比べ1/5~1/10程度に製造コストを低減出来るという革新的な技術の優位性をフルに発揮し、着実な事業成長の基盤を築くことを計画している。また、開発品は日本国内にとどまらず最初から世界市場での販売を視野に入れ、少ないメンバーながらグローバル開発に取り組んでいる。さらに、様々な疾患治療薬として大きな可能性を有する新規ペプチド医薬品の創製にも傾注しており、中期的には世界を舞台に先進的な研究開発型医薬品企業として事業を展開していくことがJITSUBO創業以来変わらぬ夢であり、目標である。近々、当社製品が日本、世界の市場で承認を得て、患者により良い選択肢を提供できる日が来ると信じ、これからも精進していきたいので、農工大学関係者の皆様のご支援を宜しくお願いしたい」と述べている。

AT-Netzとしても、今後もこれまで同様の支援を続けていくが、同窓会としても数少ない一人歩きできる大学発ベンチャー企業が誕生しつつあることをご承知いただき、同窓生の皆様からの暖かいご支援をいただけたら心強い限りです。

2

第2の人生は深海魚で バイオベンチャー

野口 誠(工化院 S54)

鳥取県の農工大出身者は、40人前後います。農工大同窓会は、江原宏昭会長(農院 S48)を中心に毎年10人前後の参加者で行っています。毎年、農工大同窓会本部から参加いただいて、和気あいあいの雰囲気で開催をしています。本年度は、亀山秀雄先生をお呼びして、農工大の近況や発展している様子の説明を聞きながら、楽しい時間を過ごしました。

私は、農工大を卒業後、そのほとんどが鳥取県食品加工研究所、産業技術センター勤務で発酵食品、健康食品などの技術開発に携わってきました。大学時代は、高分子物性(工学部 金子六郎先生)が専門でしたので、全く専門とは異なる分野に飛び込み、微生物、食品、バイオ関連の研究開発を行い平成27年3月に定年退職し、第2の人生に入ったところです。現在、アグセル研究所を設立し、細胞の3次元化ができる培養液の製品化を行っています。

私は、鳥取県産業技術センターで平成13年ごろから、健康食品の産業化ということで、魚ウロコからコラーゲン抽出などの研究開発を行い、鳥取県での健康食品の中心的な素材に育てることができました。これらの研究を続けている中で、私は偶然に、動物の細胞が集合して、シャーレ上で立体化する、いわゆる3次元(スフェロイド)化する素材を発見することができました。

10年ほど前になりますが、ガン細胞を殺す成分がないかと食品成分を中心に素材をピックアップして実験をしていたのですが、全く効果がない素材がありました。ある程度可能性がある素材を選んでいましたので、なぜなのかと疑問に思い、顕微鏡を覗いたところ、細胞が集合した画像が見えました。その当時は、それが何

なのかが全くわからなかったもので、その後、数年間顧みることがありませんでした。

その後、段々管理職の仕事が多くなり、このままでは、研究もできなくなるという思いから、最短でできる研究開発を今までに行った研究から探してみることにしました。その時に頭に浮かんだのが、細胞集合した画像でした。この現象が何なのかを調査している段階で、再生医療等で細胞培養の最も基礎的な培養方法(3次元化)に繋がることがわかりました。

この素材は、深海に生息するノロゲンゲの皮と身の間にあるヌルヌル成分で、ヒアルロン酸を含んでいます。ノロゲンゲは、新潟県から山口県近辺の日本海の深海に生息しています。日本海は氷河期に凍結し、その後、氷河期の終わりに大量に真水が流入した時にかなりの生物が生息できなかったようですが、ノロゲンゲは、その中で生き残った魚種とも言われています。日本海の深海に大量に生息する魚です。たまに、お腹の中にホタルイカが入っていることがあります。

この素材については、その後、退職するまで数年間研究を行いました。道半ばでもあり、第2の人生で、アグセル研究所というバイオ関連のベンチャーを立ち上げることにしました。

イモリなどの尻尾の再生では、ヒアルロン酸などの細胞外マトリックス成分が重要な役割を果たしていると言われていています。ノロゲンゲの抽出液は、ヒアルロン酸を含んでいます。この抽出液に向かって、ガン細胞などが集まってきます。生体内ではどのような細胞がこのような素材、成分に集まりやすいのか、特に、組織再生時における細胞の集合に関係してくるのかどうかに興味のあるところです。偶然に発見したものですので、将来、再生医療の基礎研究に役に立てばと思います、アグセル研究所を立ち上げました。第2の人生にとっては、やや、荷が重いかもしれませんが、頑張ってみようと思っている

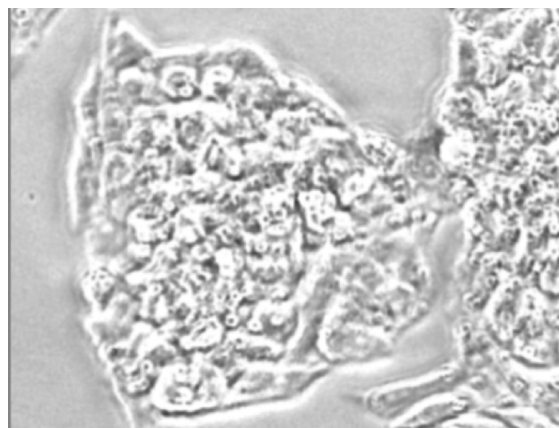
所です。

農工大の卒業生の方にもこの分野に関わっていらっしゃる方も多いと思いますので、興味がおありの方は、是非、ご一報ください。

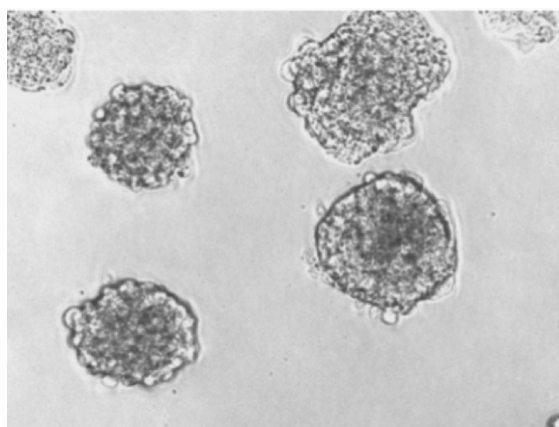
ガン肝細胞の3次元化



深海魚：ノロゲンゲ



無添加



ノロゲンゲ抽出液添加

私は、日本の伝統文化に惹かれ、中国河北省の高校卒業後、平成12年4月に来日した。日本語のブラッシュアップの一環として、すでに日本語能力試験1級の資格を取得しているが(平成16年)、それだけでなく、日本をよりよく理解できるよう華道(草月流)、茶道(裏千家)、和服の着付け等に関する資格も取得している。

専門に関しては、身近にある環境問題から地球規模で起こっている人口・環境問題に至るまで、すべての環境問題に大きな関心を抱いてきた。この十数年間、人口・環境問題の探求のためにイギリス、ポルトガル、マレーシア、タイ、インドネシア、韓国等の様々な国々を訪問し、現地調査を行ってきた。現在は、本学国際環境農学専攻の教員(農学研究院助教)として、持続可能な開発を効果的に実現する人口動態に注目しつつ、途上諸国・地域、特に中国の人口問題に関する調査研究を行っている。

母国中国が国策として実施してきた「一人っ子政策」が出生性比の不均衡、また高齢化の加速など様々な問題を生じているのを見るにつけ、私は、これらの人口問題、特に高齢化の加速に係わる問題への興味を膨らませ、中国の都市部と農村部において12地域の実証調査を進めてきた。最近では中国における高齢化産業の市場規模の現状と動向についても量的実証調査を行い、その研究成果公開によって台湾企業の中国大陸への進出することを成功させ、その発展のためにも調査による助言等で協力している。

中国は世界に華僑・華人を約4,000万人近くも進出させてきた歴史があり、世界の人口流動化にもっとも大きな影響を与えているという観点から、中国人のグローバルな人口流動の要因解析は、世界の人口問題を研究する上で、社会的に重要な意義を持つ。中国では、経済発展にともなう農村部から都市部への労働人口の移動や、「一人っ子政策」の厳しい賞罰制度を逃れるための北京・上海などの経済発展を遂げた都市部から香港への妊婦の移動など、人口が流動化している。このような人口流動は、すでに国際的なものとなり、今後、さらに規模が大きくなると予想されているが、周辺各国に対する影響の大きさについて、本格的な実態調査はまだ行われていない。そこで私は平成25年度より中国の経済発展および人口抑制とグローバルな人口移動の関係について、一人っ子政策の焦点を当てた実証調査を行い、日本に代表される少子高齢化が進んだ周辺各国に対する長期的な影響を予測してきた。今後も人口・環境問題に着目しつつ、それらの研究成果の一端を、本学農学府における教育・研究においても有効利用していきたい。

この場をお借りして、博士課程において多大なご指導を頂いた故・若林敬子先生及び副指導頂いた淵野雄二郎先生、また着任後様々な面でご指導・ご支援を頂いている高橋明善先生に心より厚く御礼申し上げます。

Ⅲ. お伝えしたいこの事実

1

浮ついた 「日本ワイン」ブームへの警鐘

戸塚 昭(農化 S34)

日本における2014年のワイン消費数量は369,326klに達した。この数値を全国の成人一人当たりで換算すると、年間3.4lの消費数量に相当する。しかし、2014年のワイン市場の構造を観察すると、約70%強を輸入ワインが占有し、国内製造ワインは約30%である。さらに、国内製造ワイン109,952klのうち約87%は海外原料に依存するか、または外国産ワインを製品の一部分に使用したものであり、純粹に日本国産原料用ブドウにより醸造されたワインは約1,375klに過ぎない。

日本産ワイン原料用ブドウに関しては、関係者のご努力により、「甲州」と「マスカット・ベリーA」の2品種がO.I.V.(Office International de la Vigne et du Vin:国際ブドウ・ワイン機構)のブドウ品種リストに記載され、国際的に認知された。

このような時代背景を基に、国税庁は平成27年10月30日付で「果実酒等の製法品質基準」と「酒類の地理的表示に関する表示基準」を国税庁長官告示として制定した。前者は外国産ブドウ、外国産濃縮ブドウ搾汁および外国産ワインを原料あるいは原料の一部とした《国産ワイン》と、日本産ブドウのみを原料とした《日本ワイン》を表示のうえで明確に区別することを法的に規定したものであり、後者はブドウ産地と醸造場の所在地の関係等、表示に関して細部にわたり規定したものがある。

O.I.V.(国際ブドウ・ワイン機構)の発表による

と、2015年の世界のワイン生産数量27,440,000klに対して、消費数量は24,000,000klと生産過剰である。永年にわたる国際的なワインの生産過剰は、燻詰ワインの国際取引数量が減少する一方、英国、ドイツ市場ではアルゼンチン、チリ、オーストラリア、南アフリカ等のワイン新興国からバルクワインを輸入し、小売容器に燻詰して販売する《直詰ワイン(リボトルワイン)》が増加している。日本においても、すでにEPA(経済連携協定)が発効し関税が撤廃されたチリおよびオーストラリア産バルクワインについては、《直詰ワイン》がスーパーマーケット、CVSの店頭に見受けられる。

その一方でECとのEPA交渉と、TPP(環太平洋パートナーシップ)交渉の進展に伴う日本農業の構造変化に対処するため、農業の6次産業化推進、地方創成や「ワイン特区」制度が採用された結果、ワイン用ブドウ栽培技術とワイン醸造技術が未熟にもかかわらず、ワイン産業に夢を抱いて新規に参入する人々が増加し、全国的にワイナリー設立ラッシュが続いている。平成27年度末現在の果実酒製造免許量数は465場だが、平成25年度からの3年間に新規免許付与数は53場と急増している。しかも、ブドウが手に入れば、ワインは簡単にできていると思っ

ている人々が多い。新規参入者には《自然派》と称する《古典に回帰》した醸造法を目指すワイナリーが少なくない。え、酢酸臭や酸化臭等の醸造学上の欠陥を有するワインに《個性のあるワイン》と誤った認識を持っている傾向がある。市場で高い評価を得ているワインは、いずれも近代ワイン醸造学の恩恵を受けている。特に、日本のようにブドウ樹の生育期から収穫期、ワイン醸造

期にかけて高温多湿な環境にある地帯では、近代ワイン醸造学を武器とした《野生微生物との戦い》の日々である。

私が代表理事を勤める一般社団法人 葡萄酒技術研究会(事務局:甲府市)は、本年6月に設立60周年を迎えた。また、50周年に際し設立したエノログ(Enologue:ワイン醸造技術管理士)部会には、若手を中心に約130人の技術者が登録され、本会の活動はもとより、パリに本部を置く国際エノログ連盟(Union International des Enologues)の活動を通して、国際的な技術交流、情報交流を行っている。弊会は今後も《醸造学上の欠陥は個性ではない》という基本概念に沿って、ワイン原料用ブドウ栽培技術とワイン醸造技術に関する正確な技術情報の発信に努め、日本ワインの品質向上に寄与したいと考えている。

上述のように、口あたりの良いだけの「日常ワイン」は、国際的に生産過剰であることを忘れてはいけない。支払った代価に見合う「欠陥のない個性あふれる酒質の《日本ワイン》」を市場に流通させるためにも、同窓生の皆様のお力添えをお願いする次第である。

2

科学博物館でのボランティア活動

壁矢 久良(織工 S35)

1. 科学博物館の概要

東京農工大学の科学博物館(法人化前は繊維博物館)の創設は明治19年、当時は農商務省農務局蚕病試験場(現北区西ヶ原)の参考品陳列場にはじまっている。平成28年は創立130年記念の年で、11月には盛大な記念式典を開催した。

この博物館の所蔵品の数は、初期の蚕糸関係標本をはじめとして各種の繊維および繊維製品・蚕織錦絵・生糸商標・製糸・紡績・織機・ニット

等大型繊維機械・組み紐台・製紙関連品・手動から電卓までの各種計算機等々数万点にも及んでいる。収蔵品展示のほか、博物館活動としては学芸員養成課程の教育、友の会サークル活動、講習会、講演会、子供科学教室などが行われており、我々の繊維技術研究会活動もユニークな存在である。

2. 繊維技術研究会の誕生

大学の使命である教育研究の組織は常にその時代の要請に応えるべく改革は進められてきている。繊維博物館に深く関係していた学科として昭和50年代後半までは製糸学科と繊維工学科があったが、現在では改編して繊維プロパーの学科はない。

20年程前から全国博物館協議会で博物館のあり方も熱心に協議され、文化庁でも文化立国の実現に向け文化振興マスタープランをたて、伝統文化の継承・発展や文化を支える人材の養成・確保の必要性が叫ばれていた。その中で繊維技術研究会の発足は時宜を得ていた。活性化した繊維博物館を目指すには繊維技術に関ってきた人材の支援が必要とされていた状況でもあった。

初期の活動は大型繊維機械の動態展示が主たる活動であったが、その本来の目的は繊維技術の伝承並びに調査研究であり、技術発展の過程を詳らかにしてその思考から将来への指針を探り次世代に伝えることである。そんな思いに共感する方々の集いが本会であり、東京農工大学出身者を中心として他大学出身者もおられ、繊維関連会社で重責を担ってこられた方々の集団で、当初は10人ほどの会員であったが、現在は30人を越えている。

本学出身者では繊維工学卒が殆どで昨年製糸学科卒が1人入会されたが、多数の学科卒業生の参加を期待し、願望している。

3. 繊維技術研究会の活動

繊維技術研究会の目的は、繊維技術の伝承・研究・開発であり、博物館の展示・啓蒙活動を支援している。その内容を以下に列記すると、機械の保守と動態展示・解説と技術相談・講演会・出版・教育支援、など。

4. 今後の課題

現会員の高齢化・整備用経費の調達などが当面の課題であるが、機械整備などに限定せず広い分野での人材勧誘である。専門分野に拘わらず、卒業生各位の多数の参加をお願いする次第です。

ご希望の方は、是非、科学博物館
(TEL 042-388-7163)にご連絡下さい。

3

はじめての入院に思う

高木 利之(織工 S38)

平成28年3月30日の夕方でした。近所の床屋に行き、散髪間際に胸が苦しくなりました。

過去20年、狭心症の治療を受けており、ここ5年はほぼ完治と言われていました。ニトログリセリンは常に携帯しており、すぐに含みました。今迄は30秒もすれば治りました。今回は効果が無く、直ぐに救急車の手配を頼みました。サイレンやざわめきを感じて、「お茶の水、J大学病院へ」と伝えたようです。間もなく、違う病院で様々な処置を受けたようでした。後で知りましたが、J病院なら30分、この病院なら5分、30分ではもたないと救急隊は判断したとのこと。急性心筋梗塞でした。

カテーテル治療後、後遺症も無く、13日間の入院でした。今後は再発予防の為、一層の内服管理、食事療法、運動療法が大切であるとのこと。この体験で学んだり、生じた変化等に少し

触れてみます。

1. 内服管理

6種類でいろいろ注意事項があり、油断できません。この内、「心臓の活動を弱めて、その負担を軽くする」と言う薬があり、そのせいかとても疲れ易いです。

2. 食事療法

- ①その内容 病院食が良いモデルです。1日当たりの栄養量(1600kcal、塩分6g未満等々)、食品構成が退院時に示されてわかりやすいです。
- ②食事への専念 新聞、時には本を読みながらという60年余の悪癖を絶ちました。1口30回の咀嚼もほぼやっています。食事時やそれ以外でもテレビは見ません。食後30分は休みます。

3. 運動療法

早朝体操等を1時間、夜のウォーキングを30～50分を続けています。速さは以前の半分位。

4. 体調の変化

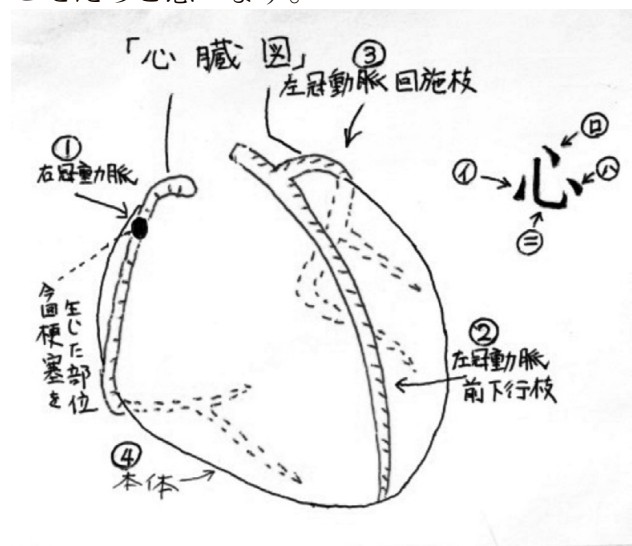
17歳から十二指腸潰瘍に悩まされてきました。農工大卒業後、Bタイヤ会社へ就職、3年で退職し、零細な園芸店とサクラソウ(Primura sieboldii)栽培を続けて、50年が経ちました。持病は軽減こそすれ、治りませんでした。それが入院を機に、薬が全く不要になりました。20年余のJ病院の掛かり付け医S先生も「不思議だね」とのこと。九死に一生を得て心臓も必ず治るとのお見立てです。

5. ある思いつき

退院に当たり、主治医の先生(偶然にもS先生のお弟子さん)が手描きの心臓図(別掲)、模型、手術時の動画を使い、説明していただきました。

右冠動脈①、左冠動脈前下行枝②、左冠動脈回
 施枝③の太い3本の血管があり、各々から細い
 血管が分かれていて、心臓本体④に酸素、栄養
 を送り、養っているとのこと。今回は①の太い
 部分に梗塞が生じたので、ステントを入れ、血
 流を回復させたそうです。

余談ですが、この図からの想像です。「心」は
 心臓の象形と言います。①は(イ)に、②は(ロ)
 に、③は(ニ)に各々対応しているのでは?…、
 蛇に怖じず、ですか。とにかく、皆さんのお陰で
 救われました。今後も植物相手に、心静かに過
 ごせたらと思います。



今朝も馥郁とした香りを漂わせながら、蓮の
 花が咲いています。

駄文へのお付き合い、有難うございました。
 (2016年夏)

4

賞典録

中村 圭一(林 S39)

東京高等農林学校校歌に“賞典録をなげうち
 し、偉人の愛を語るとき”とあります。また、農学
 部本館前には、大久保利通公の立派な石碑が
 建っています。

私はわが母校と大久保公とが何かの関係があ
 るのだな、とは思っていましたが、具体的には

よく分かりませんでした。たまたま、2015年の
 秋、千葉県佐倉市にある国立民俗博物館で、「大
 久保利通とその時代」という企画展がありまし
 たので、足を運んできました。

大久保公は謹厳実直な人ですが、部下に対し
 ては親切な人であったといわれています。囲碁
 が大好きで、負けるとその日は不機嫌だったそ
 うです。

岩倉使節団の副使として欧米を視察した大久
 保公はイギリスの国力の所以は近代的な製造工
 場にあることを知ります。また、ドイツのビス
 マルクからは国際政治は所詮、弱肉強食であり、
 日本は近代化しないと欧米列強により植民地化
 されてしまうことを肌で感じ、産業の振興に心
 血を注ぎます。

内務卿に就任すると、当時の輸出品の中心で
 あった生糸を増産するため、群馬県に富岡製糸
 場を作ります。自分でも蚕の桑の苗木や種を外
 国から取り寄せて、生長の比較をしていました。

同時に、殖産興業のためには優秀な人材の育
 成が必要であることから、明治7年4月に内務
 省勸業寮内内藤新宿出張所に設置していた農事
 修学場が狭くなったこともあり、駒場野に敷地
 50ヘクタールの官立の農学校を設立すること
 にしました。

そのために大久保公は明治8、9年2ヶ年分の
 賞典録(明治維新に功績にあった人への効学金)
 5,423円96銭8厘(現在の価格で約3,500万円)を
 勸農局に献納しています。

明治11年1月24日の開校式には、明治天皇の
 行幸を仰いで、“農は国の本なり…、国民をし
 て益々、豊饒ならしめんことを望む”との勅語
 をいただき、大久保公も祝辞を奏上しています。

しかし、その4か月後の5月14日、出勤途上の
 四谷、紀尾井坂で不平士族6人により斬殺され、
 48才の生涯を閉じることになりました。大久保
 公の年表では、明治維新の輝かしい功績などの
 最後は“賞典録を駒場農学校に寄附する”で終

わっています。

戦前の命日には、青山墓地にある大久保公の墓前で大久保家と本校の生徒・職員が墓参していたとのこと。なお、三男の利武氏は本校に在籍したことがあります。

暗殺された日の朝には、福島県令からの陳情をうけ、“明治維新の実現には30年はかかる。これからは若い人達の活躍を見守っていききたい”と出して社しています。

大久保公は幼馴染の親友の西郷隆盛からの手紙をいつも大事に胸中していました。明治10年の西南戦争で西郷が亡くなったとの知らせに号泣していたとのこと。

大久保公の本校開校にかけた思い、日本の将来に対する大きな夢、志なかばで凶刃に倒れた無念さは如何ばかりでしょうか。



5

ボーイスカウトのモットーは「そなえよつねに」

白井 國明(電気 S46)

皆さんはボーイスカウト(以下、スカウトという)をご存知でしょうか。「最近、街で見かけなくなった」と思われる方も多いかも知れません。日本国内のスカウト人口(指導者を含む)は

昭和58年の33万人をピークに、平成27年は12万3千人となっています。

かく言う私は昭和32年9月に地元・千葉市の検見川小学校にスカウトができると聞いて親にねだって入隊した次第です。当時の検見川町は半農半漁の田舎街で、キャンプなどは遠い存在でしたが、検見川町では青年団のバックアップと地元名士の小児科医師や市会議員の協力もあり、スカウト組織が生まれ今日(結団58年)に至っています。

スカウトに入って、小中学生の時は指導者の指示のままに行動していましたが、高校生になった頃意識も高まり、仲間達とスカウトに関していろいろ調べ始めました。

◆生い立ち

ボーイスカウトの創始者は英国人、ロバート・ベーデン・パウエル卿(男爵)です。彼が自らの経験を基に書いた『Aids to Scouting for N.-C. Os and Men』という「下士官・兵向けの斥候の手引書」が多くの学校で使用されました。少年たちにも評判が良いことを知り、当時憂いていた青少年教育のために対象読者を少年とするべく研究を始め、実証するために1907年イギリスのブラウンシー島に20人の少年たちを集めて、実験キャンプを行いました。このキャンプ経験を基に、1908年『スカウティング・フォア・ボーイズ』(原題:Scouting for Boys、「少年達のための斥候術」)を刊行しました(当初は少年たちが買い求めやすいように6分冊として発行され、後に一冊に合本)。この本が大きな反響を呼び、本を読んだ少年たちが自発的に組織(パトロール/班)を形成して善行活動を始めました。

スカウト運動が世界に大きく広がった逸話として、以下の話が伝えられています。1909年、米シカゴの出版業者:ウィリアム D. ボイスが濃い霧の立ち込めるロンドンで道に迷っていたところ、一人の少年が表れて目的の場所まで

連れて行ってくれました。感謝した彼は少年にチップを渡そうとしたのですが、少年は「今日は未だ善行は果たせていないところにその機会を与えて貰えたので、感謝するのは自分の方だ」と言って霧の中に消えていってしまいました。感激した彼は少年の服装や言動を頼りにスカウトの存在を知り、トランクいっぱいのパンフレット、書籍類、ユニフォームやバッジを合衆国に持ち帰って、紹介しました。これが基となり1910年にアーネスト トムソン シートンを初代総長として、ボーイスカウトUSAが設立されました。

◆ボーイスカウト運動(Movement)

現在、日本のスカウトはビーバースカウト(小学1、2年生)、カブスカウト(小学3～5年生)、所謂、ボーイスカウト(小学6年生～中学3年生)、ベンチャースカウト(高校生)、ローバースカウト(25歳までの大学生及び同年齢の青年)の5部門(隊)で構成され、26歳以上は指導者となります。それぞれの隊では年齢に応じたプログラムで「人格・健康・技能・奉仕」の4つの柱をめざし最終的には良き社会人(公民)となれるように、モットー「そなえよつねに」とスローガン「日日の善行」の下に訓育活動を行っています。

ボーイスカウト年代以上は入隊時に「ちかい」(全3条:註1)を立て、日常では「おきて」(全8項目:註2)を守ることを約束します(カブスカウト以下は、より理解しやすい内容の「やくそく」と、「さだめ」もしくは「きまり」があります)。

訓育の方法は、野外を主たる教場として「班制教育(パトロール・システム)」と「進歩制度(バッジ・システム)」によりプログラムを展開しています。

前者の「班制教育」は、隊内を複数の班(パトロール)に分け、原則として班員の互選で選ばれた班長が自分のパートナーである次長を指名して班会議を開き、班内の役割分担(記録係、

安全係、会計係、備品係等)を決めます。小生の団(前述5つの隊の集合)では毎月第1週に班長会議(次長も出席)を開き、2ヶ月分の月間プログラムを検討し、それに基づいて指導者が班長・次長に訓練を施します。班長・次長は受けた訓練を軸に班集会のプログラムを立案し、班員を指導して、隊集会(原則、月末)に臨みます。隊集会では各班が班集会での訓練結果を競い合って成果の確認をします。

年齢に応じた自主性とリーダーシップを促し自立を目的とした「スカウトの、スカウトによる、スカウトのためのトレーニング」と言えます。後者の「進歩制度」は、技能の習得を目標にしたカリキュラムで、スカウトでは「見習い」→「初級」→「2級」→「1級」→「菊」の5つのランクがあり、それぞれ習得すべき課目が決められています。スカウトは「見習い」からスタートしてその習得すべき課目をクリア(班長会議の承認)できれば次のランクに挑戦できます。個人のペースで挑戦計画を立てて中学卒業までに「菊」取得を目指します。



ベンチャースカウトは固定的な班組織は持たず、自分達の年間計画に基づいた「プロジェクト」を立ち上げ、チーム内で役割分担を定めて「P-D-C-A」のサイクルを廻し、スパイラルアップを図ります。小生の付き合ったプロジェクトで思い出深い一つは平成17年5月連休の「日本最低山を目指すサイクリング」で、3日(火/祝)00:00に東京・日本橋を出発、国道1号線を西走し、途中、岡崎で野営して4日(水)22:00に大阪の天保山(標高4.5m、註3)に至ったものです。

ベンチャー諸君8人は自転車を交代で乗り継いだのですが、サポート車2台のドライバーは指導者5人のローテーションであまり休む暇もなく、特に帰路は爆睡のベンチャー諸君を乗せて、ほうほうの態で千葉まで戻って来ました。

ローバースカウトは前述の4つの柱「人格→健康→技能→奉仕」の矢印の後ろの部分に重心を移しつつ、個人またはバディでのプロジェクトを実践します。当団のローバースカウトには、約20年のスカウト活動の集大成として年少部門の隊への指導補助とボーイスカウト関係以外の社会奉仕を推奨しています。

註1：「ちかい」 私は名誉にかけて次の三条の実行をちかいます

- 一、神(仏)と国とに誠を尽くしおきてを守ります
- 一、いつも他の人々をたすけます
- 一、からだを強くし心をすこやかに徳を養います

註2：「おきて」

- 1 スカウトは誠実である
- 2 スカウトは友情にあつい
- 3 スカウトは礼儀正しい
- 4 スカウトは親切である
- 5 スカウトは快活である
- 6 スカウトは質素である
- 7 スカウトは勇敢である
- 8 スカウトは感謝の心を持つ

註3：現在の日本最低山は仙台市宮城野区の日和山(標高3m:東日本大震災後)

を経て、21世紀の私たちはコンパスを失った船のように洋上を漂っています。こうした時に、私たちはもう一度原点に還り、生きることと仕事をするものの意味を問い直してみるべきではないでしょうか。

資本主義の行き着く先は、お金に振り回されて心を失った人々の世界、そして社会主義・共産主義の行き着く先は、新しい奴隷制の社会と言ってもいいでしょう。農の世界はそのどちらにも属しながら、片足を枠外に置いている所があります。人が存在している限り、食料は必要となりますから、農業が無くなることはないのですが、食料生産という視点からのみ見ると、大規模単作経営のプランテーションが圧倒的に有利です。そして必然的に農業はプランテーションに収斂していくことになり、中小の家族農業は駆逐されてしまうでしょう。現にアメリカやオーストラリアなどの旧植民地の農業はそうなっており、現在進められているTPP交渉の農業分野でもこの点が一番大きな問題となっています。

ただ、私たちは単に食料を摂取するために日々の食事をしているのではありません。食料を摂取するというだけであれば、毎食ファーストフードでも良いわけですが、そうすることによって悲惨な結果が待ち受けているのは、アメリカやメキシコの例を見ても明らかです。犬や猫などに餌として与えるドッグフード、ファーストフードはこのレベルの食品ですから、肥満と成人病に悩まされることとなります。日本料理がユネスコの世界遺産に登録されたことの意味をもう一度考えてみましょう。

日本料理では素材の厳選がまずすべての基本です。料理を始める前から、素材提供者(農業者であり漁業者となるわけですが)と料理人の目利きとの真剣勝負が始まります。素材が選ばれると、料理人はその素材を、手を加えたという痕跡をできるだけ残さず(この辺は日本庭園の

6

21世紀は「農」の時代【その2】

*前90号の前編に続き後篇を掲載します。

横本 正樹(農 S48)

3. 21世紀の農業は日本がリードする

戦争とイデオロギーの時代であった20世紀

作庭に似ていますが)見て喜ばれ、味わって喜ばれる料理に仕上げていきます。こうした素材は、プランテーション型の農業からはまず生み出すことはできないでしょう。

食べ物の原点は植物ですが、皆さんは植物がそれを育てる人の思いに応えるということを知っていますか？ 植物もまた生き物ですから(植物細胞と動物細胞の違いは、細胞膜と葉緑体を持っているかないかの違いだけです)愛情には応え、美味しいと言われれば喜び、(花が)美しいと言われれば喜び、もっと褒められよう、もっと期待に応えようと自身を変化させていくようになります。そうでなければ、人が植物を栽培するようになってからこのかた、このように多種多様で生産性の高い、しかも味の良い作物に変化してきたことの説明がつきません。科学的には、人による育種の成果とされていますが、植物の内発的な意志がなければ起こり得なかった、と私は考えています。篤農家の多くはこのことを知っているの、常に作物に対して口に出して、或いは心の中で声掛けをしています。

遺伝子組み換え作物がいけないのは、こうした人と植物との交流がないところで、一方的に人の都合で植物を変えていこうとしているからです。変化した植物が人に対して善い結果をもたらすのか、意志を無視されて無理やり変化させられた植物にとってみれば、そんなことは知ったことではないということになるでしょう。

再び料理の話に戻ります。

青森に佐藤初女さんという、自宅を開放して「森のイスキア」という癒しの場を主催している方がいます。90歳を越えて、今なお元気なおばあさんです。

そこでは、心の悩みを抱えた人たちが、全国から訪れて、初女さん手作りの食事を一緒にいただきます。初女さんが握ってくれたおむすび

を食べて、自殺を思い止まったという人も一人や二人ではないそうです。鬱で死のうとしていた人が、初女さんがただ一生懸命握ったおむすびを食べることによって、自殺を思いとどまると言います。そのおむすびからは、初女さんの深い愛情が伝わって、食べた人を、こんなに自分は愛されて嬉しい、という気持ちにさせるのでしょう。

「料理はいのちを移し替える作業」だと初女さんは言います。植物や動物のいのちを、人のいのちに移し替える、それが料理だと言うのです。心を込めて丁寧に料理されたものを食べると、生きる力が湧いてきます。体の60兆個の細胞全部が喜ぶのです。

この話を読んだ時、私はコンビニのおにぎりを思い出しました。コンビニのおにぎりは、一見衛生的でおいしそうですが、食べて感動はありませんね。何となく餌を食べさせられているという感じがします。むしろ家内が握ってくれるおむすびの方がよほどおいしいと思ったことを思い出したのです。

要は、植物達と心を通わせながら、その能力を最大限に発揮させるお手伝いをしているのが百姓であり、そうしてできた作物を心をこめて料理して食事を提供する人がいる。人々の間にそうした意識の変容が起こらないかぎり、現代の人々の食をめぐる不幸はなくなるでしょうし、真の平和が訪れることもないでしょう。日本に伝わった仏教が神道と融合することでできた思想に、「草木山河悉皆成仏」という言葉があります。人や動物だけではなく、この地球上のすべての自然そのものが、この世で仏になる過程にあるのだよ、という意味になります。

40年余り百姓をしてきた中で、植物から教えられることは、生物の進化の目的(人も例外ではありません)は、より良く・より質高く・より美しくステージを駆け上っていくことだということです。その先に何があるかわかりませんが、

むしろ判らなくてもかまわないと思っていますが、昨日より今日、今日より明日と、自身のクオリティーが向上していくことこそ、生きる喜びそのものなのではないでしょうか。ステージを1段上がるごとに、視野が開け、世界と自分との関連性が理解できるようになり、生きていることの意味を改めて問うことなく、そのまま人生を楽しむことができるようになってきます。

死んだ後に楽園を求めるのではなく、この人生そのものを楽園(高天ヶ原)としなさい、と私たちの神話は教えてくれています。そしてかつてこの楽園に一番近い所に住んでいたのが私たち日本人でした。このことは、幕末日本を訪れた欧米人達の日本人や日本文化に対する感想や、「逝きし日々の面影」などを読むと良くわかります。

21世紀は、その文化的背景も含めて日本の農業が世界の指針となっていくことでしょう。微妙なバランスの上にかろうじて成り立っている、プランテーション型の農業が世界を席卷している限り地球に未来はありません。餌だけ供給されて、成人病だらけの家畜として生きていくか、農と食を基盤に置いた新しい文明を築いていくか、今私たちは岐路に立たされているのであり、選択するのは一人一人の皆さんです。(完)

7

東京と高層ビルの風景に思う

有森 正浩(農工 S52)

農林水産省に36年間勤務し、地方各地を転勤しながら土地改良事業に携わってきた。3年前に退職し東京都内のさる一般財団法人に再就職2年間勤務し、東京暮らしをする機会を得た。

土地改良事業が行われるのは農業振興地域であり都市ではない。事業による効果が大きくて、やりがいのあるのは見わたす限り遠くまで田畑

が続く広大な農業地域であり、高層ビルなどはなく市民と呼ばれるような人々もいない。すがすがしくて気持ち良かった。思い返すに感慨深い。

一方、昭和52年に農工大卒業以来36年間を経て平成25年、再び東京に戻って見ると、年月を経た東京の風景は大きく変わっていた。かつて東京湾を隔てて千葉から望んだ東京の風景は瓦礫のようなコンクリートの低層ビルが単調に広がり、その遙か向こうには崩れ残った塔のような新宿の高層ビルが屹立し、アクセントになる緑地のようなものも見当たらず、まるで墓石が並んだ広い墓地の向こうに供養塔が立っているようにも見えた。なんとも寒々とした眺めに思えた。

今はどうか、千葉から眺めれば、重畳と立ち並ぶ高層ビル群で空間が埋め尽くされている。まるでビルの高さの分だけ東京の大地が一段階せり上がったようである。新宿の高層ビルはもう見えない。

高層ビルの一つひとつは、意匠を凝らしてそれなりに美しい。しかし一括りのビル群として遠くから眺めた場合には、色合いも白々として単調で殺風景、絵になっていない。

人間は小さい。ビルの谷間に居れば、目の前のビルしか見ることができない。遠望した場合の東京がこんな風景になってしまった。そのことに気づくことも難しいのであろう。

国土交通省の統計によると、平成27年度の実績として、東京都内だけでビル工事が年間約3兆円の規模、月にして2.6千億円のペースで発注されている。ほとんどは公共事業ではなく、民間の工事である。よくこれだけのお金を支払う人や企業がいるものである。お金はどこにあるのか一体誰が払っているのか。日本はバブル崩壊以来失われた20年などといわれ、GDPの伸率は僅かで先進国中最低といわれている。そのような中、超高層のオフィスビルにおける盛ん

なニーズに実態はあるのか。国内企業はだめでも外資系企業の入居が多いとも聞く。しかし、外資が経済成長の低調な日本にわざわざやって来る理由が分からない。

あちこちで都市再開発と称する大規模建築工事が行われている。これらはミニバブル、建築物を利用したマネーゲームのようにも見える。あるいは隣の大国のお金持ちが単に不動産投資を行っているだけなのか。都市は人・物・金が集まったその結果できたもの、都市が自らを創造したわけではない。東京は参考にならない。農山漁村は闘って自らを創造していった方がいい。

8

役所も人手不足です

藤田 二(農工 S58)

私は昭和58年3月に農業工学科を卒業して、4月に北海道庁に採用され、今年で34年目になります。現在は、札幌市の本庁舎で農政部に勤務しておりますが、執務している7階の窓からは道庁赤レンガ庁舎が目に見えます。連日、大型バスに乗った外国人観光客が引きも切らず多く訪れており、北海道の経済を潤しています。

一方、自分の職場に目を向けると、道庁の農業土木職は募集人員を下回る人数しか採用できない状況にあり、人手不足となっています。これは農業土木だけでなく、土木など他の技術系の職種も共通しています。また、他の県でも同様だと聞いています。職員数の削減を長年続けたため職場の年齢構成はいびつで、35歳以下の職員が極端に少なくなっております。最近になって採用予定数を増やしましたが、応募が大変少ない状況で、我々が受験した時と比べると、応募者は5分の1くらいになっています。この原因を自分なりに分析すると、

①長期間公務員の採用を行わなかったため、先

生と学生が道庁を就職先と考えていない。(ある教授「道庁さんでもう人を採用してないんでしょう」)

②農業土木を専攻する学生が減っている。例えば、農業土木科のある農業高校が3から2に減った。大学の学生数が減るとともに、農業工学科がなくなり他の学科と大括り化され、講座で専攻する学生が減った。農学部は女子が多く農業土木の就職を希望しない。

③建設会社等の民間は募集も多く内定が早い。公務員は合格発表が遅いため先取りされてしまう。(給料も民間が良いようだ)

④北海道は広いため、職場が変わると転勤となるが、親元から離れたくない(親が離したくない?)ため、市町村に受かるとそちらに行ってしまう。などが考えられます。

専門的で大規模な農業を展開する北海道では、まだまだ農地の整備に対する要望が多く、農業土木技術者の確保は重要な課題となっています。最近、東北の震災や熊本の地震などの大災害が発生しており、復興支援のため道庁からも10人の農業土木技術者を派遣していますが、今後、このような状況が全国的に続くと、大災害への十分な対応ができなくなるのが危惧されます。建設会社でも、必要な技術者やオペレーターが不足していると聞きます。人口が減少する中、必要な社会基盤整備を支える体制の再構築が必要と考えます。北海道庁では、現役の学生の皆様はもちろんですが、社会人の採用枠もありますので、Uターン、Iターンを含め、広い大地で美味しいものを食べながらのんびり生活したい方は、是非、ご応募ください。今なら、入りやすいと思います。(たぶん)

9

形を変える

竹内 俊博(化工 H4)

東京農工大卒業の皆様、ご活躍の事と存じます。

皆様、時計皿ってご存知でしょうか?化学系、もしくはバイオ系に携わっている方であれば、ご存知であられると思います。私も仕事上、毎日、使用しております。ちなみに時計皿(英: Watch glass)とはバーナーあるいはアルコールランプ上で物質を溶かして状態を観察したり、秤量する際、薬包紙の代わりに使用したりするもので、製法が時計の上蓋と同じだった為、そう呼ばれているそうです。

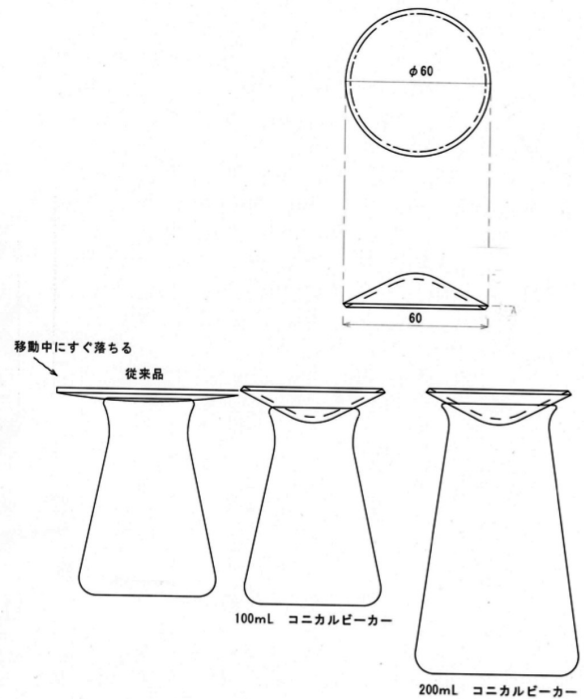
現在では、テフロン(ポリテトラフルオロエチレン:PTFE)製で一般にテフロン時計皿(そのままのネーミングなんですけど…)と言うものが存在し、ガラスの時計皿と同じ形状ですが、炎で炙る事は出来ないのです。ビーカーの蓋としての用途が主です。

こうなると製法も違う、使用用途も違うのに時計皿という名前はおかしい。しかもよくずれ落ちる。

もっと良いものはないかと実験研究器具カタログを探し回ったがなかった。そこで作ってみました(右図参照)。

少々ゆれても必ずビーカーの中心に戻ってきます。また、ハンドリングも良く、自分で言うのもなんですが、上々のできです。

これを社内でコニカルビーカーに使用していますので「コニカルキャップ」という名称(仮称: とりあえず時計皿という名前だけはつけたくなかった)にしました。これが全国に広まったらうれしく思います。もし興味のある方がいらっしゃれば是非、東京農工大同窓会を通じてご連絡いただければと思います。



IV.ひとこと言わせて教育問題

1

就職相談員を退任に際して一言 7年間の感想

茂田井 宏(農化 S37)

動機

かねてから、勤務先で理系の採用や面接に携わった経験を活かし、私には頼りなさそうに見えた後輩の就職の支援したい気持ちがあった。退社を機に、自ら、知り合いの教官を通じて、相談員に志願した。相談業務を開始するに際して、元の勤務先の人事部からレクチャーを受け、自分なりの考えをまとめ、方針を決めた。最初の通過関門であるエントリーシートや第二関門の面接では農工大の伝統である実学を目指す、研究、実験、実習、学会発表などのテーマを背景に、自己PRするように努めた。市販の就活のハウツー本の記述とはできる限り差別化し、オリジナルになるように指導した。短文で簡潔さを求めるエントリーシートの添削には従来から嗜んでいた俳諧の素養が大いに役に立ったと思う。

実績

前半の3、4年は就職氷河期、後半の3年は売り手市場であったが、その指導は情勢に応じ柔軟に対応した。特に氷河期では有能な女子学生が採用に至らず(役員面接4回受けても落ちることもあった)、相談室で涙を流すことも多かった。女性のため、上質なティッシュを用意し、相談はひたすら傾聴に徹した。そのうち、後半は安倍内閣の女子活用政策が効いてきたためか、女性の採用は、男性との差がなくなってきた。誠に喜ばしいことである。

農工大はキャリア教育が遅れており、学生の就職への意識、心構えが低いと思う。就職は受験と同等の意識であり、なんで成績の優秀な私が不採用になるのかという気持ちが強い人が多かった。就活に失敗して、自己を否定されたと感じて、ノイローゼ気味になる学生も少なからず見受けられた。そういう学生は相談の経過から見つけやすく、大事に至る前に担当教官に連絡し、積極的にケアをお願いした。ここ2、3年は公務員試験も単に頭が良いだけの人材の採用を避けるため、面接による人物評価の比重が高くなり、公務員志望者の相談が増えた。企業での面接のコツが公務員試験にも指導できるようになり就職相談の幅が広がった。

後輩へは自分で言うのもおかしいが、この7年間は身銭を切ったの過剰サービスの相談業務に終始したと思う。短期で成果を出さなければならぬので、これがベストの相談だと思っている。相談件数は年間120件ほど、メールでの相談も入れると累計1000件ほどこなした。また、新聞を読めと言っても読まない人もいたので、自分でとっている日経新聞の就職関連記事の切り抜きに解説をつけて、相談室前に掲示した。家内には自宅で購読している新聞がまともに読めないと小言を言われたこともある。

就職支援システムの構築

当時、同窓の櫻井邦雄氏(農化37)が就職システムについてはすでに構築していたが、それだけでは不十分で、専門の就職支援係を置くように強く主張してきた。工学部では教官が就職支援はするのは当然との意見が強かったが、農学部には農学部なりの事情もあり、就職支援係の

設置は、私もまったく櫻井氏の主張に同感であった。システムがしっかりしていれば、たとえば、担当が変わっても、就職支援は維持継続すると考えていた。現実には大学側(誰が当事者/責任者かは判らない場合が多い)の姿勢は基本的に総論賛成、各論反対であり、担当者が変わると、なし崩しにご破算になる傾向が強く、システムの維持に苦労した。

それは支える事務方や就職委員会の意識も問題があったと思う。担当が異動した場合は、私の知るところでは、引き継ぎがないので、PDCAが回らずシステムや組織の進歩発展がないこと、しかも担当が1、2年の頻度で異動するので、再び、元からやり直しになる場合が多く、相談員はいつも戸惑うケースが多かった。それに加えて、就職支援は他大学のように専業の担当はいない。しかも、事務分掌が明確でなく、メインの仕事でないとの認識があるので、仕事がスムーズに進まず相談システムは進歩、発展できなかった。

就職支援の在り方

私は国立も私立同様に、最近では教員・事務・同窓生の三位一体の経営が定着していると思っていた。また、①学生支援(その中で、就職支援はとくに重要)、②研究、③教育の3つの柱が、学生にとって、大学志望の魅力を醸し出すと信じていた。詳細は省くが、現実には違っていた。比較的リーダーシップを持っている教員は、研究重視であり、就職支援は二の次に見えた。1年任期の就職委員も、あまり熱心とは思われなかった。これは農工大が研究主導の機関であり、研究実績以外はとくに就職支援は評価が低いと言わざるを得ない。また、就職支援係を置いていない大学は本学だけかもしれない。教官の就職支援の負担を軽減するためにも、今後、情勢に応じて専業の就職支援係の設置の再考をお願いしたい。長期的には大学の存亡にもかかわ

る問題である。

おわりに

就職支援システムに関しては、パート並みの待遇であったので、権限がなく、思うように進まなかった。むしろ、就職が売り手市場になるとシステムはなおざりになってしまった。しかし、農工大農学部本館正面前のケヤキ並木の四季のうつろいを眺めながら、週一回の相談業務をこなした7年は生きがいと満足の年月だったと思う。この7年で得た経験を就職活動8則にまとめた。参考にさせていただきたい。

就職活動8則(まとめ)

1. 偏差値では内定は決まらない! 採用試験は大学受験ではない、正解はありません。(うまくいなくても、自分を否定された訳ではない。単なるミスマッチ。落ち込まないこと)
2. 就活の学習には限界がある! ES、WEBテストは学習である程度のコツはマスターできるが、面接は能力、人柄しだい。
3. 採用数も限界がある! 一企業では、同じ大学、学部から、多数は採用しない。1~2名程度と心得ること。人材の多様化の為である。
4. ビジネスライクに! 本音と建前を使い分けよ。建前を特に使うこと。就活は会社とのバトル、お互い対等である。
5. 億劫がらずに! 会社を知るにはOB/OG訪問がベストです。
6. 聴くは一時の恥、聴かざるは一生の損! 各ステージで、2、3回落ちたら、第三者(相談室、教官)に必ず相談する。欠陥が分かるかも知れない。
7. モラルを持って! 内々定はできるかぎり、一社のみにする。内々定を断るときは、相談室、教官に相談すること。
8. 採用側は成績表も観ています(成績表から性格を分析できる資料あり)。成績の良い方が

有利です。

勉強しろよ！成績の良い方は自己PRをしましょう。

最後に、この記を読んで、我こそは母校の為、相談業務で後輩を支援したい志のある人材が現れることを望んでいる。

2

年寄り世代の戸惑いと期待

木口 憲爾(養蚕院 S44)

我々のような年寄り世代には、便利でいい時代になったなあと思う反面、世の中のあまりに急激な変化に戸惑いや漠然とした不安を抱えている人が多い。理由はいろいろあるが、その一つにIT技術の急進展に伴うPCやスマホ等電子映像メディアの急激な普及がある。識者によれば、育ち盛りの子供達はメディア接触時間が異常に長くなり、子供達の生物学的・身体的発達ばかりでなく、社会的発達・文化的な発達にも深刻な影響があると心配されている。バーチャル・リアリティの世界に接している時間が長くなったのは子供だけでなく大学生や社会人も同様であり、布団に入ってから風呂の中でさえスマホを離せない若者も少なくないと聞いて呆れる。昨年の信州大学入学式で、学長が「スマホ止めますか、それとも信大生止めますか」と新生生に問いかけ、新聞や週刊誌で賛否両論が噴出した。若者には「この情報化時代にナンセンス」という意見が多く、我々世代には概して「そうだそうだ、良く言ってくれた」と肯定的な意見が多かったようである。便利なのは分かる。だけど便利なアプリが出れば出るほど、一方で「何か大切なもの」を失っていくような気がして年寄り世代は不安なのである。

高齢者が戸惑いを感じる理由は、産業構造の急激過ぎる変化にもある。たとえば農業・林業・漁業等の第一次産業の縮小が著しい。我々が学

生だった昭和40年代の総農家数は550万戸前後であったが、現在約215万戸と半減し、少子高齢化ともあいまって地方では限界集落化が進み農山村消滅の危機さえ心配されている。当然ながら第一次産業の縮小に伴って、農林業従事者のみならずその子供の数も減少する。すなわち農業を身近に肌身で知っている人の数が大きく減り、今後さらに拍車がかかるだろう。こうしたことは、急激な電子映像メディアの普及とあいまって、日本人の農業に対する意識の希薄化を招きかねないのではないか。日本の国土の狭小さや中山間地の多い特殊性、食料自給率の低さを考えれば、ある一定レベルの「農業を営む力=農力」の維持が不可欠ではなかろうか。それなら兼業農家の存在にも意義があり、むしろ、積極的に日本農業の制度設計の中に組み込んでどうか、などとあれこれつぶやきながら年寄りは世の行く末を心配している。

次々起こる世の中の急激な変化に戸惑いつつ、テレビで熊本地震の災害支援ボランティア活動を見ていて胸が熱くなった。スマホを首に下げながら額に汗して黙々と支援活動をしている若者達のエネルギーに大きな可能性を感じたからである。そういえば、すでにかかなりの大学で、ボランティア活動のもつ教育力に注目して、災害支援ボランティアの他、環境保全・介護・幼児保育などのボランティア活動が実施されており、一部の大学では単位認定されていると聞く。農林水産業の現場は、生と死のリアリティ、自然と調和した時間感覚、季節や気象変化への感受性、食料問題、環境保全、さらには地域社会や消費者とのつながりなど、生きた智慧を学ぶ絶好の場と考えられる。スマホ世代の学生に農林業を体験してもらう意義は大きい。我が母校でもすでに様々な取り組みをしていることと思うが、より積極的に農業ボランティア活動のポテンシャルを生かした教育を期待したい。

3

文部科学省の戦略か

松岡 稔 (林 S45)

良寛禅師は「裏見せて表を見せて散る紅葉」と歌った。わたしは「裏のみで表見せれず散る紅葉」となりそうであるが、散り際に一筆書かせてもらう。

私は某私立の工業大学の非常勤講師として、土木施工管理の講義を行っていた。授業の一環で宿題として、1級施工管理技士実地試験問題から「①盛土工事で盛土のための購入土の土量を地山土量で求める②その土量を11トンダンプトラックで運搬する場合のダンプトラックの積載土量を求める③ダンプトラックの延べ台数を求める」という問題を出した。

さて、土というのは、地山の状態からそれを掘削し、再びこれを締め固めた場合に土量(体積)に変化が生じる。この土量の変化率は地山を基準にして、ほぐし率L、締め固め率Cで表す。

ここで、通常、土をほぐせば土粒間の間隙が大きくなり、ポリュウムが増え土の密度、即ち単位体積重量は、ほぐした土量と地山の度量のそれとは異なってくる。

従って、当然、出題問題では土の変化率、土の単位体積重量(SI単位系表示)等は与えられている。

この宿題では、参考として①の購入土は一致しているも、「②ダンプトラック積載土量③ダンプトラックの延べ台数」では相異なる解答を出している市販の2社のテキストの解答を示しておいた。そこで、「先ず各自①②③を解いて見なさい。次に市販の2社のテキストの解答が[問題]なぜこのようになったかを考察してみなさい」と出したのである。

そもそも、この出題者の意図する問題の狙いは、次のようなものと思われる。

1. 土量変化率、密度と言うものを理解している

か。

2. 11トンダンプトラックの積載可能量が分かっているか。(11トンは重力単位だというのがミソ)

3. 重力単位、SI単位系について理解しているか。

4. 計量値、計数値というものを理解しているか。

しかし、ここで出題者に重大なミスがある。それは購入土の単位体積重量が与えられているが、これが地山か?ほぐした土のそれか?明示してないことである。

学生から提出されたレポートは真面なのは皆無でその内の2、3を簡単に紹介すると、

①積載土量の少ない方は、過積載を防ぎ、安全にゆとりをもって運搬するため。

②積載土量が明確に決められていないため、法律の改正などがあつたと考えられる。

③机上か現場サイドの人とかテキスト制作に関わった各々に違いがあつたから。

さて、学生レポートを最初に読んだとき唾然とした。これでも大学生なのかと。しかし、家に帰り段々と私をオチョコッテイルのではと思ひ、非常に不愉快になった。一夜明け、ふと思ひ出した。知り合いの業者の所で働くこの大学のOBが自慢げに「うちの大学の卒業生は業界で評判がよいのですヨ。ショベルを持たしても文句を言わない」と言っていたことを。そこで思った。これは文部科学省の教育政策の成果なのかと。そうか、彼らは犠牲者なのかも知れないと。今教えている学生達はあたかも禁断の木の実を食べさせないようにと、思考力を養う教育を受けていないのでは。昔、私が高校に勤めていたとき日教組は中学までに97%を落とす教育をしていると当時の文部省と対立していた。当時初等教育で算数、数学を好きになる生徒は数%であり、高校では7割が授業について行けずに卒業していたという。

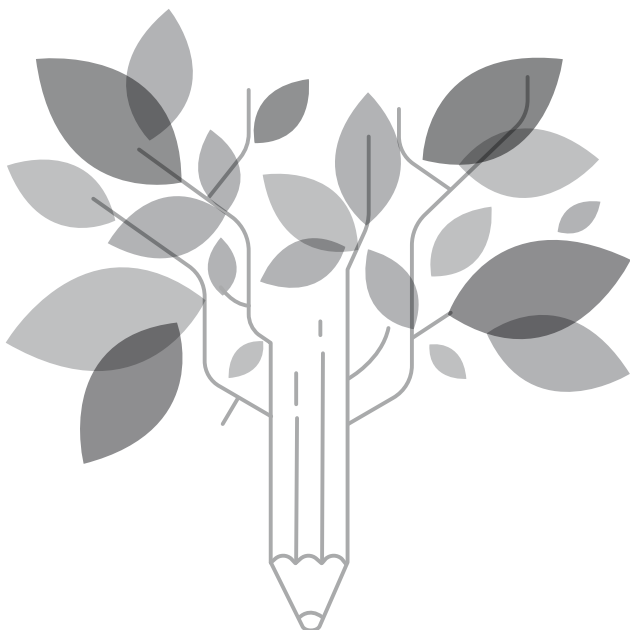
これは現在もまだ変わらないのかも知れない。現に数年前の数学教員らでつくる社団法人

memo

日本数学会が初めて国公立の48大学で、1年生を中心とした5,934人にテストを実施したら、大学生の4人に1人が「平均」の意味を正しく理解していない。更に奇数と偶数を足すと奇数となる理由の説明の正解率は34%、線分の3等分方法は8%、そんな結果が出たそうだ。

後日談だが、水理学の専任教授にも言われた。学生は密度は求められても、それ以上は無理だと。

さて、18世紀以降、教育とは基本的に国民に共同体で生きる人を育てることであった。この共同体の維持のため封建時代では身分制度があり、職業選択の自由がなかった。現代社会では、この「思考力を重視しない教育」がその方策の一つとされ、文部科学省の戦略に組み込まれているのではないか、と思うのである。



V. 絆を強める多彩な部会活動

1

武蔵野山梧会会報の 農学部図書館への寄贈

岡部 廣二(林 S35)

我々は昭和35年に当時の農学部林学科を卒業したが、卒業後お互いの連絡を取りたいものであると言う希望により、毎年会報を出すことにした。その第1号は馬場信行君が中心となり、同年11月1日に発行され、それから毎年発行され、「良くて3、4年続けばよいが」と危惧されていたものが、平成27年の今日まで、毎年欠かさずに発行し続けている。

最も原稿が少ない年は僅かに4人の投稿にすぎないこともあったが、最近では10人以上の会員から近況等が寄せられ、懐かしさとともに級友の現況を知ることができ、会員は毎年の発行を楽しみにしている。編集は当初の馬場信行君から、荒井宏君に引き継がれ、約10年前から筆者が担当している。第一号から会報は「武蔵野山梧会会報」とされて来ており今年度で56号に達した。今年で卒業55年になるので、出来ることなら、農学部図書館に1セット寄贈し、このようなクラスもあったと言う証を残したいと言う希望が出てきた。

そこで、今年5月24日に開催するクラス会総会で会員の同意が得られたならば、山梧会報を1セット同図書館に収蔵していただけないかという話となった。予めこの趣旨を図書館に説明して、かなり私的な面もあるが、図書館に収蔵していただけないかをご相談したところ、閉棚扱いで収納して頂けると言うこととなった。総会で概ね全員一致の賛成を得たので、総会に欠席した者の意向も可能な限りの把握に努め、併

せて物故者についても奥様方の意向を可能な限り確認に努めた。この結果、特に反対するものはなく、ほぼ全員の同意を得ることができたものと考え、納入の準備を開始した。

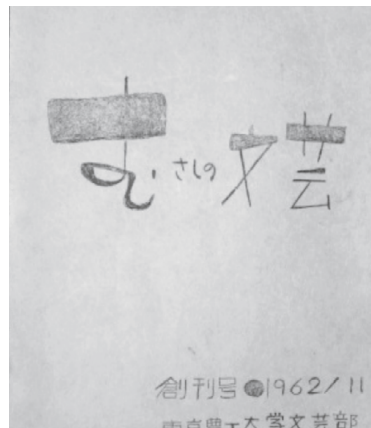
準備と言っても、ごく薄い冊子が56冊もあるので、それを6冊に製本するだけであるが、これを現在山梧会会報の印刷を長年お願いしている印刷会社に依頼し、製本が出来上がったので、馬場君と平成27年10月30日に農学部図書館にお渡しした。何となく大きな仕事を成し遂げたと言う感じで、その晩、国分寺駅前で、同君と二人で飲んだ一杯は実に甘露であった。

自画自賛となるが、よく56号も続いたものである。第1号は紙質も粗末であり、また、ガリ版刷りであり、その時代の世相を示している。さらに、毎号原稿を出している会員もあり、会員の協力が無ければ、このように続かないかたであろうと思うが、馬場・荒井両君の努力による場所も、大なるものがあつたと思つている。

2

文芸部 ～半世紀ぶりの再会～

鈴木(藤倉) 輝征(林 S42)



農工大に、かつてサークルとしての「文芸部」がありました。創部は昭和37年で、この年に部員の作品集である「むさしの文芸」を創刊しています。

文芸部の活動は「むさしの文芸」の発行及び作品互評会と予め特定の作家の小説を読んでおき、読書感想を交えて意見を交換し、小説の特徴、本質を明らかにしようとする読書会の二つが柱でした。

この互評会や読書会には必ずと言ってよいほど一般教養・物理学の助手のポストにあった堀口大井先生(故人)が大変な熱意で参加してくれました。

文芸部のOBの方々とは近年連絡を取り合い、平成25年にOB会を開催することができ、実に50年ぶりの再会となりました。2回目は平成27年3月に水道橋の会場で6人が集い楽しい会となりました。

この文芸部に所属した同窓生で、文芸部OB会に出席希望の方や、かつての部員の消息をご存じの方は、是非、下記にご連絡下さい。お待ちしております。

最後に堀口先生とこの会への出席を切望しながらも、死去した和歌山県の山口彰久君(林S42)のご冥福を祈りつつ稿を閉じさせていただきます。

連絡先 鈴木 輝征
〒299-0117 市原市青葉台4-23-2
TEL/FAX 0436-61-4699
E-mail ; Fujikura-aobadai@mvi.biglobe.ne.jp



文芸部 OB 会 (平成 27 年 3 月)
右から 伊藤龍彦 (農 44)、内藤敏雄 (製糸 45)、
三宅文太郎 (農化 40)、稲垣紘三 (林 41)、
金児克忠 (農化 44)、筆者、敬称略

3

所 感

城間 恒紀(農化 S42)

昭和42年に卒業して来年で半世紀(50年)となりました。現在、沖縄県の支部長をしております。年に1回同窓会の総会に出席し本部との繋がりがありますが、思うように支部会員へ有益な事を還元できなく、心苦しい次第であります。

支部長をひきうけてから、年に1度支部会員の懇親のため支部会を開催しています。

名簿上100人程度の会員中、15~20人程度の参加者数で、多くの会員の参加を促し支部会の活性を図りたいと考えています。何か活性化の良いアイデアは無いものかと思案しております。

私が入学した当時沖縄は復帰前で、本土の大学に進学するのに、県の選抜試験を経て、全国の国立大学に配置された時代で、当時農工大には県出身の学生は4人しか在学していませんでした。

入学はしたものの農工大学のことは全く知識がなく、右も左もわからず、たよりは在学中の先輩諸氏でした。帰省した時、同窓会名簿から先輩をさがして親交を持つようにした経緯があります。先輩後輩がお互い同窓生としての誇りと価値観の共有があったような気がしていました。現在は同窓会員も増え、ネットなどから情報も多く、若い人達には当時の感慨が薄れたような気がいたしております。

私事としては、奉職も10年前に無事リタイヤ、古希も過ぎ、悠々自適な生活を送っています。入学当時を振り返りますと、大学の正門から本館へのけやき並木の景観と大久保利通の顕彰碑(歴史上の人物に会ったような気がして)には感激した事を思い出します。

入学後、農芸化学のクラスのメンバーには、

留学生として迎えられ、大学生活の不安を払拭して親しく付き合ってくださいました。特に年末や連休の折は、山に誘われたり、自宅に招待されたり、私の下宿では、試験前には泊まりで一緒に勉強したり、対策を練ったり、また時には徹夜でマージャンやトランプ等に興じたりして、よき友に恵まれ充実した学生生活を送ることが出来感謝しています。近年はクラス会を各地で旅行しながら旧交を温めています。(今年は水谷先生と懇親を兼ね北海道で開催)

また、弓道部に入部し、4年間の経験のおかげで、奉職中、50歳を過ぎた頃から学生時代に弓道をしていたことを思い出し、趣味と健康のため30数年ぶりに復活、現在は生活の中心になっています。

沖縄県の弓道連盟に所属して、平成14年から理事に就任、会計、事務局長、理事長、副会長等を歴任して、現在は、週日、特に週末には、小学生、中学生、一般の初心者へ弓道の普及と指導をする毎日です。体力の維持とほけ防止にも大いに役立ち、生きがいとなっています。特に私の孫たちは県外にいる関係で日頃は会えませんが、弓道をしている小中学生が孫のように感じられて楽しく相手にしています。

おかげさまで健康そのものです。これも農工大学のおかげと感謝いたしております。
(沖縄県支部長)

4

昭和45年卒業 ワンゲル部同期会

寺澤 幸一(電気 S45)

昭和41年4月、東京農工大学ワンダーフォーゲル部で出会ってから、早や50年を迎える平成28年(昭和91年)を機に、ワンゲル活動でのテント寝袋生活を思い出に「みのむしの会」と名付けたものの、一度も開催していない同期会を平成28年2月19日(金)に池袋のホテル・レストラン

で行いました。

45年以上も互いに連絡も取らず、話したこともない仲間同士の集合場所での出会い・挨拶は、空白の時間を感じさせない「やあーやあー元気、元気」の一言で、45年がひとつ飛びで埋まり、不思議な感激する思いで始まりました。

その後の宴会では、「中国、アフリカ等での技術指導、コンサル業務」、「木材組合業務」、「育爺活動」、「化学開発会社経営」、「各種シルバー活動」等々の互いの近況を話し、余り山歩きの昔話に終始することもなく、もうすぐ70歳とは思えぬ積極果敢に人生を謳歌している仲間の姿が見えてきました。これはワンゲル活動での「少ない飯でも重い荷物を担いで培った頑張り力」の賜物と感嘆させるものであり、あっという間の短い2時間でありましたが、楽しく、有意義に過ごすことができました。

少し残念なことは、物故者1人、行方知れず1人、病気療養中2人、遠方・所用欠席3人と会えない仲間が多く、「齢を重ね、先が短くなると、昔の仲間に会ってみたい。」と思うようになるもので、次回以降、全員で会える機会が来る夢を見ながら散会としました。



幹事会の風景

モデルは爺さんばかりで、写真もボケて申し訳ありません。
後列左から、渡辺晴男、小平哲夫、垣内元紀、
寺澤幸一(幹事)、向 恒雄(次回幹事)
前列左から、豊福正己、三谷 清、丸山正毅、
山本 明、今田孝志

なお、労を厭わず、45年卒業相当を含めたワンゲル部同窓会を企画される場合等々、何事で

も当方にパソコンメールterra470812@watch.ocn.ne.jp(住所録を用意しています。寺澤)で連絡を戴くよう、よろしくお願ひします。

5

平成27年東京農工大学同窓会 蚕糸生物学部会 総会・懇親会報告

蚕糸生物学部会長 安藤 俊幸(蚕糸院 S51)
学内部会事務局 普後 一 (養蚕院 S48)

平成27年10月17日午後1時から東京農工大学同窓会「蚕糸生物学部会」の総会及び懇親会が東京農工大学50周年記念ホールにて開催されました。

先回の蚕糸生物学部会の総会及び懇親会は2000年に蚕糸会館(有楽町)で行われましたが、それ以後開催されておらず、実に15年ぶりの総会及び懇親会の開催でありました。

東京農工大学同窓会本部に登録されている蚕糸生物学部会会員登録者は、1715人でありました(住所不明者を含む:平成27年6月現在)。今回、蚕糸生物学部会事務局からは1151人の同窓生へ「蚕糸生物学部会総会・懇親会」の案内を送付しましたが、出欠のお返事は586人の方々から頂き、当日の出席者は120人でした。なお、物故者の方々のご連絡がご親族からあり、お名前や卒業年度については同窓会本部に連絡し、同窓会名簿の更新を依頼しました。また、住所変更や宛先不明者についても同窓会本部に連絡し

ました。

蚕糸生物学部会総会に先立ち、安藤部会長(昭和49年卒)より開会の挨拶があり、引き続き、安藤部会長より、総会資料の説明があり(1)財務状況(2)蚕糸生物学部会同窓会員の動向についての説明がありました。財務状況については質問や疑義はなく承認されました。また、平成6年度からは蚕糸生物学部会はなくなり、蚕糸関係卒業生は生物生産学部会に統合されているため、蚕糸生物学部会は平成5年度をもって卒業生・修了生はいない状態であることが説明されました。以上、安藤部会長からの資料等の説明を終え、満場一致で総会議事を承認し終了しました。

懇親会は、本間 慎 東京農工大学名誉教授(昭和29年養蚕学科卒業)のご発声で開始され、草野洋一東京農工大学同窓会長(昭和47年卒)から、同窓会本部として蚕糸生物学部会同窓会開催への感謝のお言葉と卒業生としての誇りが語られました。次に、國見裕久東京農工大学副学長(昭和48年卒)から、最近の東京農工大学の動向についてのお話があり、東京農工大学の教員、学生、職員の活躍等についてお話がありました。

懇親会では、先輩、後輩、同期生等々との和気あいあいとした雰囲気の中で進行しました。この間、多くの方々から、大学在籍当時のお話や逸話、クラブ活動のこと、教員や事務関係の方々のことなど、卒業以来の邂逅と懐かしいお話に花が咲きました。卒業年次別(昭和10年～30年



当日の全員の集合写真

代・昭和40年代～60年代・平成年代に分別)に記念写真を撮影しました(掲載した全員の集合写真は図版が小さいため、同窓会本部に年次別写真を保管してもらう予定としています)。その後、再び散開しながら旧交を温める光景が随所

で見られました。

懇親会の最後に、濱野國勝先生(前蚕糸生物学部会長:昭和42年卒業)からご挨拶があり、またの機会の再会を皆で祈念しながら、散会いたしました。

column

駆ける同窓会同好部会 1

農工大への支援をさらに進めるために 《農工大支援ネットワーク》

部会長 深水 智明 (織工 S38)

平成25年4月に農工大同窓会に同好部会(前・集団部会)の設立と同時に、私共「農工大支援ネットワーク」(AT-Netz)を発足させました。当同好部会では、農工大支援活動を機軸として農工大関連の技術および異業種間の交流促進支援、農工大学生の進路・教育活動等の支援、本会メンバーによる農工大同窓会誌「農工通信」の編集支援および農工大産学連携支援等を進めていますが、部会メンバーは各々が得意とする分野で活動を進めております。それらの活動の一部をご報告し、同窓皆様のご助言をいただければ、幸いに思います。

●農工大の研究を中心にした技術交流会

この分野の活動は、同窓生を主な対象に、一般市民も加えて、「農工TECの会」と称する技術交流会を実施しています。これまでに、「工業原料としてのシルクについて」、「醸造技術をベースにお酒の楽しみ方」、「ロボットとその技術」についての技術交流会を開催しました。4回目となる本年度は「植物工場の現状と展望」(植物工場見学を含む)について、農工大の先生方、卒業生による技術講演を中心に技術交流会&懇親会を開催しました。



本年(2016年・第4回)開催の植物工場の現状と展望については、荻原先生(農学研究院長)から、太陽光利用型植物工場、人工光利用型植物工場、太陽光+人工光型植物工場、国内外の植物工場、そして、植物工場の展望についてのご講演をいただき、特に、今後の展望について「植物工場は植物生産システムの一つであり、他の事業分野からの参入もでき、問題点も多いが、今後の産業の柱になるであろう」との見解が示され、大いに関心を集めました。そのためか、今回(第4回)は、従来に増してご参加者が多く、81人を数えました。植物工場の見学では、ブルーベリーの結実と開花とを同時に見ることができ、また、樹木から直接にブルーベリーをもぎっ

て賞味させていただきました。その後、懇親会では、講演会、見学会の感想を話し合うと共に情報交換等で盛況な交流ができました。今後、この技術交流会を通じて、農工大由来の技術の展開、業種を超えて農工大の研究成果の活用などのアピールに努力いたします。



●学生の教育・進路等への支援

ここでは、農工大学生を対象に、特に大学での取り組みには若干、難しい面がある学生と社会との関係づくりを中心の支援です。一つは、学生の企業見学会です。見学会は学生サークル(向友会)との共同で計画し、私共OBが企業との折衝に当たり、向友会が学内の学生に案内し、参加者の募集を行います。この見学会の特徴は、工場等の見学に加えて見学先企業の農工大同窓生との懇談会に多くの時間を取ることです。これまでに6回を実施し、学生諸君は就活にも参考になるとして、多く参加しています。第7回はこの夏休み期間(2016年)に実施します。もう一つは、学生の進路・就職相談への支援です。これにも本会のメンバーが支援に加わっており、本会AT-Netzとしてもバックアップしています。



●同窓会誌「農工通信」(後期号)の編集支援

この活動は同窓会への支援活動で、本会メンバーが支援しています。(現在、編集委員は全員が本会メンバー)具体的な活動は編集方針の検討(同窓会広報委員会にて)、同窓会の支部や部会、同窓生一般への原稿募集、寄稿原稿のフォーマット整理、手書きの清書(一部)、そして、編集業務等に当たっています。農工通信(後期号/同窓生の所感、随筆等を掲載)は毎年1月早々に発行されます。本号(92号)の農工通信も編集を支援しました。

●産学連携支援

本会メンバーはそれぞれの能力、持ち味を生かし、「農工大」全般に個々に支援活動を行っています。具体的には、本号19頁に掲載の「農工大発ベンチャー企業 JITSUBO(株) 医薬品企業として自社品開発を加速」のような産学連携支援の活動を進めています。過去に遡りますと、本会AT-Netzは、同窓会活動の以前は一般社団法人として、農工大の産学連携支援を中心に活動を進めてまいりました。

6

同窓会千葉県支部の運営について

松田 晴夫(農工 S54)

同窓会千葉県支部は、県庁の東京農工大学卒業生が中心となって運営され、支部長、副支部長等の役員のほとんどが県庁OBにより運営されています。

私は、長年千葉県支部の幹事を務めてきて現在は幹事長を拝命しています。

千葉県庁は、母校から地理的に近く、県内には農学部のある大学も無く、しかも農林業の盛んな県でもあり、多くの本学農学部の卒業生が勤務しています。

かつては、学科ごとの同窓生のまとまりが強く学科単位で同窓会が行われていました。

この学科単位の縦の繋がりを、各学科から選出された幹事同士が横のつながりをつくり同窓会千葉県支部が運営されています。

同窓会への参加者はほとんどが農学部卒業生ですが、近年は工学部卒業生にも声をかけるようになり、現在は少数ですが工学部出身者も総会に参加するようになりました。

さて、幹事の主な仕事は、2年に一度開催される支部の総会の準備をすることです。特に総会時に催される懇親会は世代を超えた同窓生の親睦の場として大きな役割をもっています。

これまで幹事は特定の職員が長年担当してきました。このため学科を超えた幹事同士の連携が取りやすい反面、幹事が固定化することで同窓会への参加者も特定化してしまい、特に若い年代の同窓生とのパイプが無くなり同窓会全体の高齢化が問題となっていました。

そこで、なんとか若い世代の同窓生の参加を促すため、私の前任の幹事長が支部役員若返りを行うとともに、特に若い県庁職員を多数幹事に引き入れ幹事の若返りを図りました。

このことが功を奏し、近年の支部総会では多

くの若い同窓生が参加するようになり、平成26年度総会は、出席者数が93人で若い同窓生、年配の同窓生が入り混じり盛大な同窓会となりました。



幹事会の風景

今年は、支部総会の年にあたります。先日幹事会を開催し支部総会の開催準備について打合せました。昔と違い若い幹事が多く活発な会議となりました。

総会の開催までは、いろいろ苦勞が多いのですが、同窓生の皆さんは総会後の懇親会を一番楽しみにしています。このため毎回和やかに時間が過ぎていきあつという間に締め時間になってしまいます。締めが終わっても皆さん話に花が咲いて席を立つ人がいないことから、幹事は追い立てる役になり、会が開きになった後は、学科ごとに二次会に行くのが通例となっています。

総会出席者には、県庁関係以外の千葉県在住の同窓生も多数出席されます。既に現役を退かれた先輩の中には、2年に一度の支部同窓会を楽しみにしている方も多く、会の終了後帰りに幹事さんありがとうとお礼を言われると、開催準備の苦勞がすっ飛んでしまいます。

近年は、県庁内の出身学科ごとの集まりが無くなり、縦のつながりが希薄に立ってきました。このため、各学科を代表する幹事の横のつながりを強く持たないと、同窓会千葉県支部も消滅

してしまうのではないかと危惧しています。私は来年の3月で定年退職となり今回の総会で幹事長を交替するとともに幹事を辞し若い幹事さんたちに同窓会千葉県支部の運営を託します。将来も末長く千葉県支部が運営されることを祈ります。

7

同窓会のありがたさを感じる

阿部 雅弘(林 S54)

今年3月末をもって県庁を定年退職した。秋田の森林・林業・木材産業を見続けてきた36年間、その変遷はドラマティックでもあり、決して林業は植えて育てて50年を優に擁する息の長い産業ではないことを実感した。勤めて間もない頃、時は拡大造林のピークを過ぎたとはいえ造林や保育が主で、漸く間伐事業が造林補助事業として始まった頃であったが、今では主伐、再造林の時代となっている。

また川下では、木材産業から住宅や木造建築そして国産材の活用が広く認知されるようになり、さらに「東京オリンピック競技場や関連施設を木造で!」木材それも国産材を使用しようとする気運が高まってきて、時代の変化はこれほど早いものかと驚くとともに、時のたつ早さをしみじみと感じている。

そういえば、勤めてから今までに農工大学を何回訪れただろうか?と考えると、「秋田に就職を」とリクルート活動に行ったとか、ほんの数えるほどしか思い出せない。農学部正門の櫓並木のところに守衛室があり、守衛さんが常駐しているらしいと聴くと、確かに正門横にらしきものが(失礼)あったけど「守衛さんはいなかったなあ」と思い出し、今は「関係者以外立入り禁止なのだろうか」、考えると不安を感じる。

今は、もう一度学生の頃の足跡をたどって農学部や工学部等大学関係施設を辿ってみたいと

いう気持ちが沸いてくる。特に林学出身者としては、大谷山演習林研修所や草木演習林とか、大学から離れている所にも行ってみたいが、どうやって行ったのか、今となっては中々思い出せない。まだらボケの始まりか?



東京農工大学同窓会 阿部雅弘さんを囲む会 平成28年3月11日(金) 於 季節料理「枝らた」

毎年行われる「秋田支部同窓会」では、大学同窓会理事の諸先生にご臨席いただいて大学の最新の話をお話ししていただくのが恒例となっている。そこには我々が勉学?に励んでいた頃とは相当違う大学の顔があり、「我々のいた頃はこうであったなあ」と語りながら、賑やかな宴に入っていくのである。宴も盛り上がってくる頃歌の時間が始まり、学歌や各学科の伝統の曲をみんなで合唱するものの、経験豊富な大先輩方の参加が年々減っていく中であっては、さすがのグリークラブ出身の我が身であってもなかなか歌えない曲もでてくる。

県庁退職を前に、同窓会支部長や幹事、県庁の同窓の方々から「送る会」を開いていただいた。日頃、同じ建物の中にも、なかなかお会いする機会も少ない大学の同窓の方々に参加してくれて、楽しいひと時を過ごすことができ大変感激している。これからも毎年支部同窓会に参加して、今度は大学にも足を運んでみよう、改めて思っているところである。

8

東京農工大学若手起業家 ネットワーク設立について

荒木 賢二郎(応化 H15)

「その他1%」

学部を卒業した私が最初に受け取った農工通信に記載されていた“卒業生の進路”にはこの様な記載があったと記憶しています。今から13年前の農工大では大学を卒業して起業するという学生が少なかった事は明白で、起業準備をしていた私の取り扱いに困ってこの様な表記になったのかもしれませんが。

1999年入学、2003年に工学部応用化学科(現有機材料化学科)を卒業した私は、当時、流行りつつあったウェブデザインやホームページ制作を行う会社を創業しました。当時は1日のうち15時間を仕事に使うと決めていたため遊ぶ時間も無くただがむしゃらに働き、そして夢を見ていました。

設立した会社は3年、5年と続けていくうちに軌道に乗り、食うには困らなくなるものの、私が30歳を迎えた2010年頃になると自分の中で疑問が生じてきます。

「人は何のために、働くのか」

これら疑問を解決するために私は、起業家を書いたあらゆる本を読み始めました。稲盛和夫さん、藤田晋さん、堀江貴文さん、見城徹さんなど。そうして、「人は何のために、働くのか」という問いに対して私が出した答えは価値創造でした。企業の存在理由は価値創造であり、人が生きる理由でさえも子孫繁栄と価値創造に集約される。それまで私は、自分のために仕事をしてきました。けれども、そうじゃない、仕事をする理由は自分が飯を食うためではなく価値創造のためであり、その対価として報酬を得るのだと持論を持つようになりました。

2014年には若い方の起業を支援する活動を始め、2015年3月にはMBA(経営学修士)に興味を持ち早稲田大学商学研究科ビジネス専攻へ入学、2016年7月には自ら起業した会社を去り、第二の起業へ挑戦しています。

自らを起業や経営学という立場に置いた時、東京農工大学という大学の卒業生はほとんどいませんでした。そして、この事実は、これから起業して成長をしていく農工大生にとって、決してプラスには働かないでしょう。

これから農工大を卒業して起業する若い人たちのために、数少ない起業に関する縦のネットワークを提供したい、その思いで起業やMBAに関連する有志3人と今年『東京農工大学若手起業家ネットワーク』という集まりを作りました。近年は農工大もEDGEプログラムという、イノベーション教育やアントレプレナーシップ教育にも力を入れ始め、その芽を増やそうとしているようで、その先の受け皿を作りたいと考えています。

2000年以降に農工大を卒業あるいは卒業予定の若い方で、MBAホルダー及び起業志向の方は是非、facebookグループ『東京農工大学若手起業家ネットワーク』へアクセスしてください。卒業生数も少ない農工大だからこそ、こうした起業への道筋が必要だと感じています。皆様のご参加、ご支援を歓迎しますとともに、起業やイノベーションという言葉を許容し、推進しつつある我が母校へ感謝申し上げます。ありがとうございます。

9

BASE創立20周年記念 シンポジウムが開催されました

赤井 伸行(生シ院 H16)

平成28年2月6日に生物システム応用科学府創立20周年シンポジウムが小金井キャンパス新一号館グリーンホールにて開催されました。平成7年の学部改組に合わせて、農学部、工学部、一般教養を融合した独立大学院として生物システム応用科学研究科(BASE)が発足して以来、組織再編や教育組織の学府への名称変更を経て、昨年度末までに修士1371人、博士284人が学位を取得しました。

所属した教員数も85人になります。シンポジウムには、退職・異動された先生方、同窓生を含めて124人の方にご出席いただきました。

シンポジウムは松永是学長のご挨拶に続き、来賓として宮田清蔵 初代研究科長(元学長)、小畑秀文 第二代研究科長(前学長)からご挨拶以上に激励をお受けしました。続いて招待講演として、本学卒業修了生である和田義明様(キューピー(株)常務取締役)、角井寿雄様(ライオン(株)取締役)、村上秀人様(カルソニックカンセイ(株)副社長執行役員)から、ご祝辞と共に「農工融合」、「イノベーション」、「学生に期待すること」など幅広いお話をいただきました。最後に、神谷秀博学府長から「3専攻体制となった今のBASE」についてご紹介いただき、シンポジウムは閉会となりました。

シンポジウム終了後、140周年記念会館(エリプス)にて祝賀会が行われました。シンポジウムに引き続いて秋澤淳教授の司会で、堤正臣前学府長(現副学長理事)のご挨拶、岡崎正規元学府長による乾杯の後は、BASE設立時の苦労話・裏話やBASEの将来などで大いに盛り上がりました。宮田清蔵先生による一本締めの後も各所で歓談が続き、予定時間を大幅に超過しての終了となりました。シンポジウムの様子は同窓会

BASE部会Facebookでも写真とともに報告しております。

最後になりますが、シンポジウムに先立ち、同窓会BASE部会の役員会が行われ、二見BASE部会長から部会員連絡先の収集・整備を要請されました。当面はBASE部会Facebookにて各種情報を発信していきますので、BASE部会員ならびにBASEに関係ある同窓生の方々におかれましては、BASE部会Facebookをぜひご活用ください。



宮田先生による来賓挨拶

駆ける同窓会同好部会 2

国際社会での経験を語った部会活動

《農工大グローバル・コミュニケーション》

幹事長 釣屋 政弘 (生機 S54)

農工大グローバル・コミュニケーション部会が発足して2年目を迎えたが、直近の活動を紹介したい。昨年2015年11月14日には農学部の農工祭期間に合わせて、午後1時からシンポジウムを開催した。テーマは『こんなところに日本人(お仕事編)-日本人が国際社会で働くヒントとコツ』として、永年の海外勤務や外国との交渉等を通じて国際社会での経験を積み重ねてきた会員3人がその失敗を含む数々の経験を語った。



まずは、釣屋幹事長から開会の挨拶及びNOKO G-Commが設立された背景の説明の紹介を行い、続いて、NOKO G-Comm会員である3人の方から講演があった。

最初に、辻山弥生氏(1985年、獣医卒)から『国際会議と日本人』と題した講演があった。辻山氏は農林水産省消費・安全局 消費・安全政策課調査官(国際基準チーム担当)として活躍している。また、コーデックス委員会副議長でもある。多国間や二国間の国際会議・交渉に日本人が上手く対応するには何が必要なのか。国際会議や国際交渉に参加したこれまでの経験、そしていくつもの失敗から得た「日本人が国際会議と上手につきあうコツ」についての講演であった。

続いて、永田春郎氏(1972年、電気卒)より『私はこうして英語に取り組んだ』と題した講演があった。活動の範囲を世界に拡大発信し、或いは諸外国からの情報を受け入れ自国内での常識の範囲内から外に踏み出す事による新たな発見・体験は何物にも代え難い無常の喜びなど、総合商社での体験を基にした講演であった。

最後は、押山和範氏(1979年、機械卒)より『アフリカと日本』と題した講演があった。押山氏はJICAに入構後、アフリカを中心に活躍された。また、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)ジュネーブ勤務も経験している。国際機関でアフリカの紛争と難民問題に関わってきた経験を共有し、これまでのアフリカとの関わりの中で見えてきたアフリカの姿について紹介した講演であった。



また、この部会を広く紹介する目的で、第一回の「ワインの会」を2016年5月21日(土)の午後開催した。シン・トレーディング代表の江畑進一氏をお迎えして、3時間にも亘りワインの知識及び試飲で楽しんだ。講座の内容はワインの歴史、ブドウ栽培、代表的なワイン用ブドウ品種、ワインのタイプ、そして、フランスワインの産地など盛り沢山であった。今回はフランスワインから赤、白、スパークリングワインの3種類のテスティングを行った。今後も定期的で開催する予定である。

VI. 元気を取り戻そう被災地

1

森は海の恋人 森も海も恋人

田畑 正紀(林 S55)

今から30年近く前のことである。「森は海の恋人」というキャッチフレーズが鮮烈に脳裡に焼き付いた。宮城県北東部の三陸リアス海岸、岩手県に隣接する唐桑半島の付け根にある静かな入り江の集落、唐桑町(現在は合併して気仙沼市)舞根で牡蠣養殖を営んでいた畠山重篤氏が提唱した言葉である。氏は、かつて舞根地区を含む気仙沼湾一帯に赤潮が大量発生、環境が悪化し、それが上流域の森林の荒廃に起因していることを憂い、川の流域に暮らす人々と価値観を共有しない限り、美しい海は戻ってこないことを悟ったそうである。それから、「牡蠣の森を慕う会」が結成され、全国から賛同した人々が参加して大川上流の岩手県室根山で毎年落葉広葉樹を植える活動が行われている。牡蠣の生育が湾内に流れ込む大川に影響を受けていること、上流域の森林から栄養分が運び出され、それらによって植物プランクトンが育ち、それが牡蠣の餌となる。1個の牡蠣が一日200ℓもの海水を吸って餌のプランクトンを捕食していることは、学術的にもお墨付きで、森と海との関わりを見事に物語っている言葉である。

私は、物心ついた頃から、親父に連れられて海や川や湖沼で釣りに興じてきた。学生時代は登山やスキーの魅力に取り憑かれてしまい、釣りから遠のいてしまったが、宮城県に奉職(林学を専攻し、林業職で採用)後、職場の同僚にカレイ釣りに誘われたのがきっかけとなり、以後、海釣りの深みにどんどん嵌まっていった。専ら、

仙台湾で周年遊漁船に乗船して様々な魚たちを追いかけている。湾内には幾本の主要河川が流れ込む。どの上流域にも豊かな森林が覆い、栄養分を注ぎ込んでくれている。全国でも有数の養殖場があるだけでなく、様々な魚種、魚影と戯れることができる好漁場である。



豊穡の「森と海」が茜色に輝く・日の出の一瞬
(仙台湾・船上から筆者撮影)

*農工通信は白黒印刷なので、画像の「茜色」は読者の想像にお任せするしかありません

そんな矢先、平成23年3月11日、午後2時46分に未曾有の東日本大震災が襲った。冒頭の畠山氏も被災した。海も生き物達も壊滅したと思ったそうだ。しかし、長年に亘って続けてきた植林活動が海を復活させた。舞根も養殖筏が整然と浮かび、限りなく震災前の風景に戻っている。森と海との絆だけでなく、人々の絆も一層強くなった。大きな回復力である。小生も海からしばらく遠ざかった。どうしても海に出られなかったが、社会全体が落ち着きを取り戻したのを機に、釣行を再開した。犠牲者への鎮魂の思いは絶対に忘れまい。しばし海に戯れる許しを得てからである。再開後の最初の獲物はヒラメであった。極上の魚に日本酒が進む。釣行から帰宅して自ら料理した魚(肴)で晩酌をする、至福の一時である。日本酒も、清らかでミネラルを沢山含んだ美味しい水と肥沃な耕土で育まれた米など、森が育んだ原材料が欠かせない。

感謝、感激である。小生にとって、やはり「森も海も恋人」である。そして、未だ途上にある我が被災地の「創造的復興」を一刻も早く実現させなければ…。
(宮城県支部長)

2

人口 1,142 人の町

中里 徹哉(農工 S56)

私は昭和56年に農業工学科を卒業し、現在は福島県で建設業を営んでいます。会社は、昭和42年から始まった福島第一原子力発電所の建設とともに創業し、以来全国に54基ある原子力発電所のうち、実に23基の建設にたずさわってきました。原子力発電所をつくるためにつくられた会社と言っても良いかと思えます。

私達が精魂込めてつくった原子力発電所が今はあのような姿になってしまったので、大変残念には思いますが、日本のチベットとまで言われたこの地方がこれまで生きてこられたのも原発の恩恵があってこそこのことですし、今の私の会社があるものも実はそのおかげなのです。

震災の日、原発構内から逃げてきた人達の話と、東京から電源車が向っているというニュースを聞いて、瞬間的にこれは大変なことになると予見できましたので、爆発してからの対応も迅速でした。社員達は身の危険も省みず構内道路に散乱する何百mmSvもあるガレキや津波で寄せられた車両をバックホウで片付けて、東京消防庁から来たハイパーレスキュー部隊を誘導してくれましたし、いつ爆発するかもわからな

い5・6号機の屋根に登って穴を明け、水素を逃がす作業もやりました。また、胴長をはいて、汚染水に腰までつかって地下の足場を組んだりもしました。こういう時というのは、脳にアドレナリンが分泌されるのか、意気に感じて何でもできるような気がするのです。恐怖心よりも高揚感の方が強くてワクワクして楽しかったと皆が言います。そこに社員を送り出した私は、罪な人間だったかも知れません。しかし、結果として日本全土が避難するような事態にならずに済んで良かったと思っています。

震災から5年が過ぎて、ようやく平常心をとり戻しつつあるこの頃ですが、いざ帰還という段になると新たな現実と直面することとなりました。私の住む小高町は人口12,000人の町でしたが即時帰還を希望する者は1,142人と町の人口は震災前の1/10になったのです。イノシヤクマしか住まない町には道路は必要なく、建物も要りません。建設業は必要なくなるのです。

人口減少社会に突入すると日本の人口は毎年100万人ずつ減少して行くと言います。仙台の人口がちょうど100万人ですから仙台が毎年消えてなくなるということです。恐ろしい話です。一説によると全国の75%の自治体が消滅するとも言われています。…ということはいずれ、どこの町も20~30年後には今の小高町と同じ状況になるということですから、もしかしたら、我が小高町は全国の最先端に行く町なのかも知れないのです。そう思うと急に元気が出てきて一万年も続いた日本の縄文文明のようにこの広大な農地と山林、豊かな海を利用して人口1,142人の

町を自立させてやろうと思うようになりました。建設業の役割を再考するようになったこの頃です。

※最前列右から
6番目が筆者



私は中国・内モンゴル自治区出身で、日本に留学して勉強・研究、それから社会人生活、既に14年間の経過している。大学卒業後、日本に憧れ、留学することになり、日本語の勉強や研究生生活等を経験し、農工大に院生として入学したのは2006年4月のことである。大学院を終了後は、特別研究員として働き、その後、(公社)中央畜産会に入社した。現在の主な仕事は、日本産畜産物の輸出促進に関係する業務である。

農林水産省では、平成25年4月に「農林水産物・食品の輸出促進のための具体的戦略」を公表し、農林水産物・食品の輸出金額を2020年までに1兆円規模にすることを目的としている。その中、牛肉については、輸出額を平成24年の50億円からその5倍となる250億円を目標として掲げている。弊会が事務局とする日本畜産物輸出促進協議会は、農林水産省の日本産畜産物輸出促進に関わる補助事業に取り組み、輸出目標達成に向けて日本産畜産物の輸出拡大のための課題の抽出と対応方策の検討、とりまとめ、日本産畜産物の普及啓蒙と利用拡大に向けたオールジャパン、オール畜産でのプロモーション活動等を実施している。具体的な業務は、上記に係る検討委員会の開催、海外プロモーションの企画・実施、海外マーケット調査の実施、国産畜産物の輸出に関する情報収集・分析等の業務である。

日本産畜産物は、輸出先の国では「おいしい」、「高級」、「安全安心」、「高品質」といった高い評価が得られているが、「価格が高い」というのは大きな課題になっている。当然、輸出先国や地域によって具体的に課題が違ってくる。輸出先国では、日本産畜産物が正しく認知されており、一部の国や地域では、地域ブランドが浸透されていることで「地域ブランド」と「日本産」を混同することがよくあり、日本産畜産物の更なる普及啓蒙活動を実施する必要性を強く感じている。

日本産和牛は「血統登録」、「個体識別番号」、「格付制度」等があるほか「霜降り(サシ)」が入っていることで他国産牛肉と差別化しやすい面もあるが、豚肉、鶏肉、鶏卵、牛乳・乳製品については、「日本産」としての「特徴」をまとめるのは、一つ大きな課題になっている。仕事において農工大で勉強できたことが、直接、間接的に非常に役に立っているという実感がある一方、学生時代もっと頑張っていたら、こんな苦労しないで済むと思ったりすることもある。

仕事の関係で業務上いろんな方と関わったりすることがある。偶に「農工大」出身者と出会うと「根拠ない信頼感」があり、凄く親しさを感じる。「最近、農工大に行っていないね、学園祭の時でも行くかな」、「〇〇先生知っているか、凄く助けてくれた、もう退職だろうね」、「教務課の〇〇さんは非常に優しかった、今もいるかな」などと話したりする。東京に生活している私には農工大は地理的に非常に近いところにあるが、離れて(卒業)からなかなか頻繁に行けないなと思っている。多くの皆様は同じような実感があるだろうか。いつか、農工大で皆で集まろうね~と思ったりする。



農工大の今 - 第2回 -

キャンパス便り第2回では、「オリエンテーリング部」と「ビジネスサークルPigro」について、ご紹介いたします！当コーナーは農工大の情報、学生の現状等について、先輩諸氏のご要望にお応えするために、学生の視点から「農工大の今」をお伝えします。皆様のご要望をお待ちしております！

●「オリエンテーリング部」

37期部長 磯山 高志(機シス4年)

オリエンテーリングとは？

皆さん、オリエンテーリングという競技はご存知でしょうか？オリエンテーリングとは、地図とコンパスを持って山の中に設置されたポイントを指定された順番通りに巡ってゴールまでの所要時間を競うスポーツです。速さを競うスポーツでありながら、地図から地形を判断して最善なルートを選択する知能的な面も要求されるのが特徴と言えるでしょう。ほとんどの部員が大学からですが、大会などでは幅広い年齢の競技者がいて生涯スポーツとしての面もあります。

◎活動内容

私たちオリエンテーリング部は今年で40期の新入部員を迎える節目の年になりました。近年の活動として、青梅や飯能での



【オリエンテーリング部】

練習会の開催、関東周辺で行われた大会への参加の他、夏・秋・全国大会直前の3回合宿を行って技術を向上しています。昨年度はロング競技とミドル競技の両方で1人ずつ関東代表者を出し、全国大会の場で日本一を争いました。他大との交流も兼ねた対抗戦も行っており、昨年は茨城大(今年はいばのこ)や慶応大と千葉大(けいのこちば)との対抗戦が開催されました。

部の広報として「まうんとらん」というブログが開設されています。OBOGの方や少しでも興味を持っていただけた方は是非そちらもご覧下さい。

ブログ: <http://noukorien.blogspot.jp>

●「ビジネスサークル Pigro」

副代表 奥村 航(応生4年)

“Pigro”ってなに？

Pigroとは、イタリア語で「なまけもの」という意味です。サークルを立ち上げたメンバーは学生時代、なまけものように過ごしていました。が、卒業間近になって一念発起、後輩に自分たちと同じような時間をすごして欲しくないという思いからPigroを作りました。

活動理念として「チャレンジ精神を養うこと」「目標を実現する力を身につけること」を掲げ、ビジネスをテーマに様々な活動をしています。

◎活動内容

上記の理念を達成するため、毎週の活動では講師の先生をお招きしての勉強会を行い、交渉術や特許、アイデアの出し方について知識の蓄積と共有を行っています。その他にも2・3ヶ月に1回、農工大生に向けて様々な人生を歩んできた方々によるセミナーや交流会を行い、長期休みにはアイデアコンテストに出場しています。

しかし、まだまだ私達の知識や経験は十分ではありません。諸先輩方のお力添えいただきたいと考えております。私達の活動の軌跡をHPやFacebookに記載しておりますので、ご興味のある方はぜひご連絡ください！

HP: <http://pigrotuat.wix.com/pigro-homepage>

Fascebook: <https://www.facebook.com/pigrotuat/>



【ビジネスサークル Pigro】

株式会社八木製作所

- ・創業 : 1963年(昭和38年)
- ・所在地 : [本社](JR中央線豊田駅徒歩1分)
東京都日野市豊田4-36-16
[八王子第一工場](JR中央線八王子駅バス7分徒歩3分)
東京都八王子市大和田町3-4-17
[八王子第二工場](JR中央線八王子駅バス7分徒歩5分)
東京都八王子市大和田町1-21-12
- ・業務内容: 事務機器、光学機器、医療機器等の
部品の精密加工及び治具の設計・製作・組立

困った時も八木製作所!

HP : <http://www.yagiseisakujo.co.jp>

MAIL : support@yagiseisakujo.co.jp

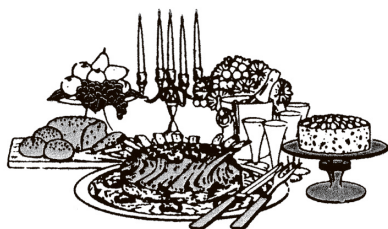
忘年会・新年会・歓送迎会・クラス会・謝恩会
PTA会合・周年行事・結婚披露宴・御法事

CATERING Service

出張料理

10-10-10 御宴会は
サンク・リアで!!

お集まりにふさわしい雰囲気演出致します。
お客様のご予算に応じたお料理お飲物を調整致します。



グラス~テーブルクロス等
あらゆる備品を用意し、
セッティングからサーバー
後片付けまですべて
おまかせ下さい。

府中グリーンプラザ内
府中駅北口駅前

サンク・リア

TEL&FAX (042) 368-6368

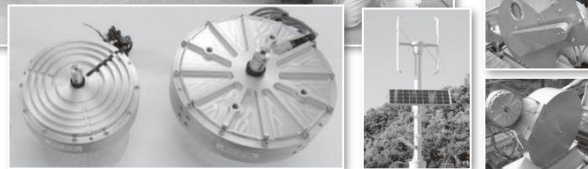
府中グリーンプラザ 会議室・和室等を御利用下さい。10名様~250名様
府中市府中町1-1-1グリーンプラザ3F

農工大の中山先生とコラボ! マイクロ発電機



データ測定会で
中山先生
亀山先生
との集合写真

場所: 小田原市
「峯自然園」



マイクロ水力、マイクロ風車の発電機に最適です!

発電機型番	回転数・出力/電圧		外形 (mm)	軸径 (mm)
	200rpm	400rpm		
MJG-2011A	12W/12V	45W/22V	200	20
MJG-2021A	25W/17V	110W/36V	200	20
MJG-2311A	50W/25V	210W/50V	230	20
MJG-2811A	100W/48V	370W/96V	280	25

未来を変えるオゾン水製造装置も共同開発中!



株式会社 丸上製作所

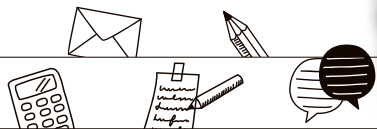
〒350-1212 埼玉県日高市下高萩新田8-1

TEL:042-984-1033 FAX:142-984-1034

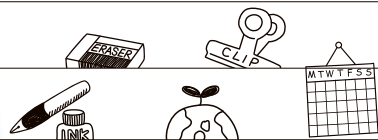
<http://www.marujoh.com>

農工
通信

No.92



事務局だより



1. 同窓会の法人化について

平成28年5月に開催された第53回通常総会において「一般社団法人への移行を検討していくこと」が認められました。このたび「一般社団法人東京農工大学同窓会」の

定款（案）を作成し、11月12日に部会と支部に対する説明会を開催しましたことをご報告します。今後ともご意見を取りまとめ定款作成の作業を進めていきたいと考えております。

2. 会費納入のお願い

会費は同窓会活動の原動力です。正会員は同封の払込票にて次のいずれかの金額を納入してください。

終身会費30,000円または年会費1,500円

- ◇農工通信に払込票が同封されていない方は納入済です
- ◇過去に遡って納入の必要はありません

3. メールアドレスの新規登録、住所・勤務先等の変更届けのお願い

事務局では同窓生への各種連絡にスムーズに対応するため、メールアドレスの新規登録をお願いしています。

同窓会ホームページ [会員情報](#)（住所変更など）から、24時間いつでも登録、その他の変更届けができますので是非ご利用ください。従来通り、変更連絡票はがきやメール・電話など、いずれの方法でも受付けますので住所、勤務先等の変更があった場合は、すみやかに同窓会事務局までご連絡願います。

なお、同窓会が所有している会員の個人情報の公開については、ご本人の意向に沿って管理・運営し、個人情報保護には万全を期しております。

4. 同窓会ホームページ「ギャラリー」の作品募集

写真や絵（日本画、水彩画、油絵）、版画など内容は自由です。200字程度の紹介文を添付して同窓会までお送りください。

送っていただいた作品の中からホームページのトップ画面や農工通信の表紙も飾らせていただきます。

みなさまの力作を奮ってご送付ください。お待ちしております。



5. Facebook活用をお願い

同窓会ホームページ [会員交流広場](#) では、Facebookを利用した会員のコミュニケーションの場を提供しています。

Facebookの利用には簡単な登録が必要となりますので、詳しくは同窓会ホームページ [会員交流広場](#) をご覧ください。

また、部会・支部でFacebookを開設された場合は、リンクを貼らせていただきますので、同窓会事務局までご連絡ください。

6. この春に卒業を迎える学生の保護者（賛助会員）のみなさま

保護者のみなさま宛てにお送りしていた会誌の送付先が、卒業後はご本人宛てに変わります（ご本人様が正会員になります）。なお、大学院に進学の場合、在学中は学内配付となります。

7. お詫びと訂正

平成28年8月発行「農工通信91号」におきまして誤りがありました。正しくは以下の通りです。

■ p.38 掲示板「大学院連合農学研究科設立30周年記念式典を挙る」

本文 右段 1行目（誤）「・・・、宗村広昭鳥取大学生物資源科学部准教授、・・・」

（正）「・・・、宗村広昭島根大学生物資源科学部准教授、・・・」

関係各位および読者の皆様にお詫びするとともに、ここに訂正させていただきます。

編集後記

Editor's note

頃春 同窓生の皆様方には良いお年を迎えられたこととお喜び申し上げます。

「農工通信」を年2回発行に増やしてから、まる4年が経ちました。皆様方からの寄稿で構成する後期号も本92号で5冊目になり、ようやく定着してきた感じがします。この間、延べ246件の寄稿文を掲載し、全国各地から多くのご意見、ご要望や編集委員に対する激励のお言葉などを頂戴しました。大変感謝しております。

本92号では、特に様々な部会の活動状況、成果報告などを

綴ったものが目立ちました。会員同士の絆を深める目的もあった後期号の“色”を強く出せた内容になり、同窓生が地道な努力をされて、結束を強めようとしている姿が垣間見れます。また本92号から、新企画「農工大の偉人たち」をスタートさせていますので、是非ご一読ください。母校の誇りを改めて感じ取っていただけることでしょう。

今後も皆様から寄せられる貴重な個性あふれる原稿をもとに、読んで楽しい後期号をお届けしていきたいと思っております。

峰松 敏夫

編集委員：

深水智明（織工S38）、畠山晃（林S40）、大亀哲郎（農工S46）、峰松敏夫（農S47）、金子由実（織高S51）、荳司雅通（電情H9）



就職先情報提供のお願い

同窓会では、在学生の就職支援のために皆様の氏名と就職先情報の提供をお願いしています。情報提供が不可の方は、同封の「住所・勤務先変更連絡票」、同窓会ホームページ会員情報、メール等でお知らせください。

なお、毎年11月時点の情報を在学生に提供しております。何卒ご了承くださいませよう、よろしくお願いいたします。

※就職支援は不可の場合の「住所・勤務先変更連絡票」記入例

地	地	(電話)	-	-
情報公開の可否*	部会・支部名簿の掲載		<input checked="" type="checkbox"/>	否
	部会・支部集会の案内		<input checked="" type="checkbox"/>	否
	本学学生への就職支援		<input type="checkbox"/>	否
<input type="checkbox"/> ご本人逝去 ご逝去日 平成 年 月 日		※同窓会誌・ホームページの掲載		可 否

★上記以外の目的について情報公開の依頼がある場合は、ご本人の同意を得ます。

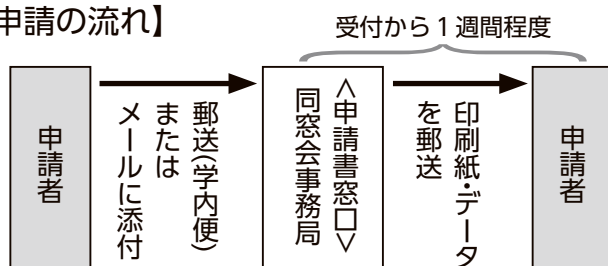
名簿提供について

本会が保有する会員の個人情報は名簿提供依頼書等により本会員に提供しております。名簿は利用目的以外には使用せず、同窓会個人情報の保護に関する規則に基づきご利用いただくようお願いいたします。

【申請手続き】

利用目的	申請者	申請書	その他、必要書類
部会・支部活動	部会・支部の連絡員	(様式1)部会・支部・クラス会等名簿提供依頼	-
クラス会・OB会等の開催	同窓会員		身分証明書(運転免許証、健康保険証など)のコピー
大学内の使用	本学および本学教職員	(様式2)卒業生・修了生名簿提供のお願い	-

【申請の流れ】



【申請書の入手方法】

- 同窓会事務局へ電話・FAX・はがき・メール等で、送付依頼
- 同窓会ホームページからダウンロード
同窓会ホームページの「事務局便り・お知らせ」
➡「名簿提供について」よりダウンロード

農工通信94号への寄稿・ご感想をお待ちしています!

「農工通信」(後期号1月発行)の編集実務は同窓生によるものです。

大学時代の思い出、農工大学への激励、社会人としての経験、趣味、同窓生交流の呼びかけなど寄稿しませんか?また「農工通信」は現役学生にとって社会人との交流の場、手段にもなります。同窓会では、現役学生への支援にも力を入れていきます。学生に向けての寄稿も大歓迎です。

- 文字数: 1200字程度(写真1枚) ・メ切: 平成29年7月末日
- 送付先: 「農工通信」編集委員会 email: nokotusn@tuat-dousokai.jp 郵送: 同窓会事務局

※クラス会の報告は同窓会ホームページ「クラス会便り」に掲載後93号(前期号8月発行)に掲載になります(詳細: <http://tuat-dousokai.org/guide/party.html>)

お知らせ

同窓会会則改正により、平成25年度の総会から正副会長・支部長を始め、部会・支部から推薦のあった理事や代議員のほか、60人以内の一般の会員も構成員に加えました。毎年1月の同窓会ホームページにて募集しますので、奮ってご応募ください。

農工通信 第92号(後期号)

発行日 平成29年(2017年)1月1日
 発行所 東京農工大学同窓会
 連絡先 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1 東京農工大学同窓会事務局
 TEL 042(364)3328 FAX 042(335)3500
 e-mail info@tuat-dousokai.jp
 URL <http://www.tuat-dousokai.org/>
 振替口座 00120-9-93147番(加入者負担)
 加入者名 東京農工大学同窓会
 印刷所 株式会社マイナビサポート
 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23-1

お中元、お歳暮、贈り物に最適

部会、支部会、同窓会でも

ぜひご賞味下さい。

[しょうてんろく]

賞典禄

農工大ブランド本格焼酎



原酒 (麦)

米焼酎

芋焼酎

麦焼酎

長期貯蔵酒 (米)

本学では、農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター (FSセンター) で栽培した原料(米・芋・麦)をもとに製造した農工大ブランドの本格焼酎

「賞典禄(しょうてんろく)」を販売しています。ご好評いただいております「賞典禄(しょうてんろく) 米・芋・麦の本格焼酎」に加えて、麦の熟成した原酒もそろい踏みとなります。ますます品ぞろえが豊富になりました。

この原酒は、本格焼酎の個性そのものが凝縮されている焼酎で、一味違う深い味わいを楽しめますので是非ご賞味下さい。

賞典禄 FAX 注文票

以下のとおり注文します。

東京農工大学 FS センター 宛

FAX : 042-367-5801

【ご注文内容】

		平成	年	月	日
原酒 麦焼酎 (2,500 円) 43度 720ml	本	米焼酎 (1,500 円) 25度 720ml	本		
長期貯蔵酒 米焼酎 (1,800 円) 41度 720ml	本	芋焼酎 (1,500 円) 25度 720ml	本		
焼酎 米・芋・麦 3種セット (4,200 円) 25度 720ml×3	セット	麦焼酎 (1,500 円) 25度 720ml	本		
			合計注文金額	円	

【ご注文者様情報】

お名前	フリガナ	
住所	〒	
電話番号	FAX番号	
生年月日	T. S. H 年 月 日	※年齢確認をさせていただく場合がございますのでご了承願います。

- 【ご注意】
- ※1 お支払いは代金引換またはクレジットカードになります。詳しくは下記 URL をご覧下さい。ただし、FAX でご注文された場合のお支払いは、代金引換のみとなりますので、ご注文者様以外への配送は致しかねます。
 - ※2 ご注文いただいた上記金額の他に、送料 (5,000 円以上は無料) 及び代金引換手数料 (代金引換額に応じた所定の金額) が必要になりますので、予めご了承願います。
 - ※3 本注文票により収集された個人情報は、賞典禄の販売以外の目的には使用いたしません。

ネットショップ : FS センター農工大市場ネットショップ

<http://www2.enekoshop.jp/shop/noukoudai/>

問い合わせ先

農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター事務局

TEL 042-367-5811